

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十八年七月二十五日 印刷  
昭和四十八年八月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通巻五五五号



No. 555

終戦の日どこで何を？

八月号

姉妹品大和錦印



警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

# 柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社  
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電話(779)1690~2番



## 尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若本真彦

本社	〒661	尼崎市尾浜町2丁目3番27号	(06) 429-5861(大代)
尼崎営業所	〒661	尼崎市尾浜町2丁目3番27号	(06) 426-5861(大代)
宝塚営業所	〒665	宝塚市旭町3丁目2番6号	(0797) 84-2300(代)
西宮営業所	〒662	西宮市下大市東町11	(0798) 52-1121(代)
西宮中古車センター	〒662	西宮市上大市3丁目60	(7798) 52-0061(代)
神戸営業所	〒653	神戸市長田区2番町4	(078) 577-0555(代)
神戸サービス工場	〒652	神戸市兵庫区小河通8丁目5	(078) 575-5256(代)
神戸中古車センター	〒653	神戸市長田区3番町3丁目228	(078) 577-2520(代)
明石営業所	〒673	明石市船上硯町2丁目1	(078) 913-0234(代)
篠山営業所	〒669-21	多紀郡丹南町牛ヶ瀬字尾ノ谷	(079594)-399(代)
篠山中古車センター	〒669-23	多紀郡篠山町郡家田中の坪842	(07955) 2-0603(代)
姫路営業所	〒671-02	姫路市御国野町国分寺牛塚56	(0792) 52-4181(代)
三田営業所	〒669-13	三田市字新土1610	(07956) 6501
加古川営業所	〒675-01	加古川市平岡町高畑	(0794) 23-3144(代)
西脇新車センター	〒677	西脇市寺内町字上492	(07952) 2-6150

## 惜しがるな

腹いせの執念のまま小さく生き  
神様も信ぜず医者にも溶けきれず  
言うなれば死をいそぐのか不信の瞳  
病みほうけたまま黄いろく消え残り  
つき放す医者 of 眼に眼で応え

長谷川幸延氏の近著「舌三寸」を読んだ。  
いつもの事ながら、氏の名筆に誘われて一気に読んで終ったが、あとがきにもあるとおり、氏の祖母上は、ものの味については一見識、一家言があった由、その祖母上が「この店はお昆布を惜しがつていかん」と評された店があった。「惜しがつていかん」という意味は、ケチがつて昆布の量を少くしたというようにとつたら大間違ひ。『適当に早く引き上げて捨てるべき昆布を、いつまでも煮出し

ている』ことを言われたのである。幸延氏はこの祖母上の批判を『料理もまた小説と同じく、材料を捨てることのむつかしさにある、と思わせられた』とうけとつて居る。  
絵の写生では、一木一石、一葉一枝が目について仕方がないし、句作に際しても無駄骨の大半は、この材料を如何に上手に棄てるかにある。その辺の呼吸を「惜しがつていかん」とずばり表現された祖母上の卓言。ほんとうに肝に銘じて有りがたかった。

中島生々庵

川柳塔八月号

座右の句

子が追えば鳩は歩るいて逃げるなり (豆秋)

私の句

献血のひと足先を蚊にいかれ

石川 侃流洞

### 川柳塔八月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

惜しがるな……………中島生々庵……………(1)

いそがぬ旅……………正本水客……………(2)

川柳初篇研究……………(百二十二)……………(20)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味丸・博美・藤井和雄・十府・岡田甫

ピンクのリボン……………東野大八……………(22)

川柳塔 (同人作品)……………若本多久志選……………(4)

水煙抄……………北川春巢選……………(30)

一分間の柳論……………本多柳志……………(27)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………橘高薫風……………(38)

謹告……………(水煙抄)……………菊沢小松園……………(39)

近詠……………西尾葉……………諸家……………(42)

沼田街道

いそがぬ旅

正本水客

むかし上越の沼田から三平峠と沼山峠の二つの峠を越えて会津へ出る道を沼田街道と云つて、人馬の絶えることのない大切な往還であったが、近世になつて利用するものも無くなつてしまつた、街道のなれの果てである。

去年の十月、その三平峠から秋の尾瀬へはいつて、心に滲みいるような静寂と目路の限りの湿原の草紅葉を味つた。

草もみじ果ての果てなる陽の名残り

今年も余りにも有名になりすぎた水芭蕉がどうしても見たくて、五月中旬の雪解けを待ちかねて春の尾瀬へはいつてみた。

水影ののぼるが如し水芭蕉 (枝幸)

生れたばかりのように清冽な水から、スツと顔を出している水芭蕉の一本をとらえては、これより詠みようがない気がする。しかし見

はるかす白の群落をうたうには

湿原はるか魂の吹き出たように水芭蕉

ぐらいでは我ながら表現力の貧しさを認めざるを得ない。

葎乃先生の祝辞……………西尾 栄……………(40)

ダイヤルは……………高鷲亜純……………(23)

終戦の日あなたはどこで何を……………(24)

野迷路・静観堂・無鬼・日満・一栄・三林坊・正朗・甲吉・操子・不酔

・柳宏子・美幸・一声・弘朗・葵水・千梢・好一・奈良子・美子

こだわらない心……………大路美幸……………(42)

初歩教室……………本田恵二朗……………(46)

大萬川柳「深入り」……………川村好郎選……………(48)

柳界展望……………(新之助)……………(50)

本社七月句会……………(庸佑)……………(52)

各地柳壇(佳句地10選)……………河原みのる……………(62)

「野 球」……………松下 梁水選……………(44)

一路集「パラソル」……………本庄 金三選……………(44)

「灯籠」……………馬場 魚山選……………(45)

編集後記……………(一三夫・葉子)……………(65)

座右の句

一本によられ二人は縄でいる (一三夫)

私の句

長かった短かったと夏やすみ

河井 庸 佑

ひうち岳の山裾に残雪の消えやらぬ尾瀬沼畔から沼山峠への道を折れると、今までの賑やかさに引きかえて様相は一変する。限りなく真直ぐに続く細い木道の先は、なだらかな熊笹のなかへ吸いこまれる。野鳥の声がなお辺りの静かさを深くする。峠までの道は、無心に絵筆をふるう年配の人にひとり会ったきり、まさに尾瀬の穴場であろう。

沼山峠は、尾瀬に生れ、そして文字通り自分の庭先のような三平峠下の雪の中で、昭和46年の暮時に三六才の生涯を閉じた平野長靖さんが、當時の大石環境庁長官に直訴して自動車道路の建設を中止させた所である

車でスッと来てガヤガヤ通り抜けていく客が地元でどれほどの利益をもたらすものか、マイナス面がはるかに多いことに気の付かない異当局などの態度は全くはがゆい。沼山峠下と三平峠下の自動車道が握手する日は、昔の沼田街道が甦る日であり、仙境尾瀬の破壊の始まる日である。歩きたくない人間は尾瀬など見る資格はない。

沼山峠から一キロほど下った所に会津へ抜けるバスの終点がある。谷から山へ、深い緑の色が津波のように車の窓へ押し寄せる。吹き上がり盛り上ってくる緑ひと色に圧倒されながら会津の秘境、検校岐(ひのえまた)を指す、今宵の宿である。めずらしい山菜と全くつなぎを使わない名物の裁ちそばが私を待っていてくれる。

ひとすじの川が緑りをせきとめる



若本多久志選

兵庫縣 遠山可住

マーケット女に庄倒されて出る  
女の子がこんなに居った昼休み  
肩書の最後老人会会長  
お茶を汲む汲まれる当り前の顔  
けんらんと誇る造花に蜂が来ず

松江市 中川晃男

燃えている胸をこそぐる青い風  
喋るだけ喋らせ「係」へ回される  
僻地のサーピス 人情とよい空気が  
煩惱を包む写経の筆冴えて  
塔影落ちて写経の時深し

倉敷市 本田恵二朗

眠っていた歴史をブルが掘り起し  
落城の哀史を苔に語らせる  
貝になろういや石になろう独り言  
旅は佳し古里に似た景に会い  
軽石の主張浮いたまま放つとかれ

八尾市 香川 醉々

鬼の面かぶって鬼になる強さ  
雑草のつもりが軽く引抜かれ  
橋越えてみても童話が見当らぬ  
えんま帳みんなにAをつけたい日  
滴りが三体仏の線画き

青森市 工藤 甲吉

百姓三代連綿といじめられ  
ホームラン風は吹かない世智辛さ  
五月雨を集めて我が家屋根が漏り  
串刺しのむごさ山女の美しさ  
左遷などとうに忘れたワラビ刈り

宝塚市 傍島 静馬

取締役会長になり雑用が増え  
変なことまた聞きにくる知恵ざかり  
子を死なし妻 人形を習いだし  
四五鉢の緑がコーポのマキシマム  
マスコット無心に揺れる事故現場

桜井市 岩 本 雀踊子

はき替えの足袋まで妻の持つおしやれ  
ハンカチに嘘をつつんで魔女となる

慾一つ消して枕へ阿呆になる  
傷つけぬように小さな罪を消す  
倅を作る地下足袋朝を出る

岡山県 浜 田 久米雄

緑之助氏句碑除幕

あの世から見る路郎師の顔浮かぶ  
内海の魚のうまさもう褒めず

水銀が髪の毛にある世とはなり  
ニコチンがもうよいというまでを喫い  
世渡りの首尾好運のせいにする

島根県 堀 江 正 朗

声かける置いてけぼりにされそうで  
砂浜で仔犬のごとし妻と居て

聞えない耳は笑いで埋めて置く  
夕暮れの声に灯りをつけて待ち  
タイミング心得えていて腹を立て

松江市 恒 松 町 紅

酔うた目に今も昔も好きな街

それだけの話しに妻の長電話

チヨットだけよと初老からかわれ

連休が拾った恋のレモンテイ

白髪フト見付けた妻のうしろ髪

豊中市 戸 田 古 方

諦めて帰れば薔薇が待っていた  
蜻の足三本だけで明石ひる

何もかも肚の立つ日は肚が立ち  
人が嫌い人が好き両方ともほんと  
鴉アアア「惚れた」「待ってて」  
かもしれず

大東市 土 井 浩 輔

泥酔の帰巢本能だけは持ち  
唇齒輔車更生誓う友と酌む

底辺に自己を埋めて媚びてみる  
座右の銘他人に書いて悦に入り  
黄昏れて役目のすんだ道路鏡

大阪市 神 谷 凡 九 郎

あの人も流す涙をもっていた  
無神論今日はもしもを待っている

才神様人間拍手打っている  
耐える事さえ馴れのおそろしさ  
力関係基盤に正義と云う論理

和歌山市 野 村 太 茂 津

隙見せて竹刀に誘う氣を読まれ  
空を打つ邪心を竹刀に悟らされ

無念無想竹刀一本だけが生き  
正眼に構えて虚を呼び実を衝く  
さわやかに負けてきれいな汗となり

大阪市 正 本 水 客

尾瀬の水芭蕉

水芭蕉まだ見ぬ夢の色に似て  
水ばしよう孤独 地の底まで水が澄む  
湿原はるか魂の吹き出たように水芭蕉  
水影がうごいて花の白うごく  
水芭蕉の群落 初恋のごと立ちすくむ

和歌山市 垂井葵水

紀州粥すすり童女の顔となる  
埴輪の唄聞えるゴルフ造成地  
軍手織り続けて軍歌唄い出す  
寝台車の夜明けて化粧匂い出す  
鶴の手網たぐる鶴匠は常の顔

倉敷市 水粉千翁

妻と踏む歩巾取り残されてよし  
下駄の音父の休日など思う  
挨拶を忘れてもよし久しぶり  
パラソルのおんなカンナの家を出る  
何も彼も不便で何も彼も溜り

八尾市 高杉鬼遊

あんたより長生きします鯉を買ひ  
正しさの通らぬ世なり石となる  
美しき貌美しく見て恋を見し  
傷心へ妻のくすりが効いてくる  
月賦完了ダブルベッドに冬の風

大阪市 河股緑水

鮮やかな彩惜しまれて虹は消え

やりくりを今日も質屋でいたわれ

お姑に理由が出来た迎え傘

市長像ちよつと猫背が親しまれ

愚亡妻

妻惚ぶ心に風が吹き荒ぶ

富田林市 板尾岳人

雪溪の下 あくびをしているみどり

足元へひんやり雲がついて来る

汗拭いて対話している峰と雲

山へ来て喋べり出したら母の顔

ふんわりと母の乳房と峰の雲

富田林市 木村弥栄子

何をしに立ったか老がふとよぎり

合掌の心の視野の美しき

勝つために闘う戦でない夫婦

禁断の木の実へナイフしのばせる

焼棒杭又想い出の道歩く

大阪市 川口弘生

目を閉じた闇そのままになるこわさ

六地藏それぞれ平和な御尊顔

海石の皆まるつくこくなりすぎる

悪筆の悪筆なりに枯れてくる

自惚れをうれしいものに生きている

香川県 三井酔夢

園芸書片手に蘭を株分けし

さし芽気になり旅程を繰り上げる

絵葉書に火をつけられた旅ごころ  
手を振って歩く新緑若返り  
逢いに出て歩き疲れたショツピング

大阪市 金井文秋

不協和音つづき夫婦に危機が来る  
冷蔵庫空っぽにして孫帰り  
肩書きをぼちぼち減らす気の弱り

転勤で孫も東京へ行く

新幹線子供に距離はピンと来ず  
まだ書けぬ孫の便りは絵が一つ

大阪市 宮尾 あいき

めいふくを祈る亡夫へ愚痴も云い  
寝過ぎた朝を亡夫の声で起き  
野球かけつ放し亡夫がすぎだつた  
さつき一つ落ちて心に波を立て

コマーションルドどおり残りの歯を磨く

大阪市 小出智子

今日を偽らず故郷に山河あり  
いっばいに胸張りつめたまま暮れる

真夜中の振子は遠い日を刻む  
母の笛吹く夜は母の悲しみが

遠い記憶の母によく似た手のかたち

大阪市 河井庸佑

思ったより根は深いよとまだじらし  
貫録が出ましたがなとからかわれ

こわい程順調ですと無気味がり  
平行線たどるふたりに気を使い  
どこでどうちごたかひとりおこり出し

神戸市 小浜牧人

石投げた波紋の中に悔があり  
人間のころろ尋ねる寺巡り  
因習の家風を交える嫁がくる  
散髪が目立たぬ齢となりけり  
梅漬けて妻の仕合せを守り

倉敷市 松下梁水

つまずいたここにも神の愛があり  
そうですかそうかと夫婦だけの夜  
格言のように行かぬ日の苦笑  
叱る日の姿勢を父として正し

恩師逝く

地に還える恩師へ土がかけられず

豊中市 橘高薫風

足摺の雨は遍路へ地から降る  
呼び戻す背なの赤子の名を呼んで  
白昼夢灰皿はわがコロシナム  
睡蓮は万丈光の光源よ  
睡蓮よ日本は毒にとりまかれ

大阪市 不二田 一三夫

『秋田実 // 名作漫才選集』第2回配本  
漫才の神話がここに生きている

朝日テレビゲスト出演(S 48・6・27) 一句

ナマ放送自分が見られぬもどかしさ

顔のほか自分を忘れている女

寄席

枯れ木も山の賑わいとは老芸人

ヘルスセンター禁句にしてる老芸人

鳥取市 河村日満

日御碕にて(二句)

絵のように夕陽の中を戻る船

焦点を句碑に合わせば昼の月

砂丘の砂あたたかしひとりゆく

ゆっくりと素足で踏めば鳴る砂丘

高槻市 福田丁路

自らを正して生きる道険し

蛸焼の飾気の無い味に惚れ

茶柱へ心豊に正座する

太陽と親の恵みを知らない子

尼崎市 黒川紫香

寮一人戻らぬ夜の日記書く

鯉に餌を運ぶあひるの愛を見し

多武峯から飛鳥へ

多武峯秋にも来いと云う紅葉

石舞台四、五人乗って五月の陽

高槻市 若柳潮花

咲いて散る悲しみ蕾まだ知らず

天皇陛下万歳共産党は嫌や

多武峯より飛鳥

くず餅へ呼び込む声と鶯と

峯降る足は歴史の里へ向き

大阪市 本多柳志

聞いてほしい言葉をさがす栓をぬき

倅せなくらしの中の隙間風

倅せな妻は中座へ泣きに行き

革新も佳し一票は保守に入れ

大阪市 山川阿茶

朝詣り鳩の親子の日向ぼこ

葉ざくらはどれが八重やら一重やら

市場籠一人世帯へ骨が折れ

プラス金マイナス金で人の価値

大阪市 福井野迷路

大阪の味をもとめて法善寺

大阪弁虚々実々の笑い入れ

それがそやおまへねやと顎なせる

大阪の笑いに涙の味がする

大阪市 西出一栄

ただの風邪と思えど齡の重み添う

まだ業が果せぬらしい病癒ゆ

雨垂れも幻想曲にして楽し

牡丹は活け崩れる様の哀しゆうて

名古屋市 吉田水車

ご親切様に土地などすすめに來  
夕煙り鯉かく音鍋の音

子守唄音痴ながらも児は眠り

七十のイメージチェンジもの悲し

門真市 福島 鉄 児

引越へ人目はばかり物ばかり

へべれけに酔える人倅せとも思ひ

主婦家業一息入れるメロドラマ

母さんの口癖 ああ忙しい 忙しい

岡山県 直 原 七面山

夜を羽ばたく女の冗舌

宇宙を論じて恋を論ぜず

枯草に似て水気など無い女

足を食う蛸のくらしに似て悲し

倉敷市 小 幡 里 風

証文を破ぶる男同士が笑ひ

木犀の匂う庭ありまわり道

うっかりとしゃべる親友一人減り

その渦を遠く見まもる僕の主義

倉吉市 奥 谷 弘 朗

家が出来処生親まで変つて來

月給を運び小使い渋られる

奥さんの新葉やせるのを捜し

底抜けの馬鹿になれたらフワイトが出

今治市 越 智 一 水

嫁がせた夜は夫婦で飲み直し

子を中心に歩けば貧しさなどわすれ

安らぎに気づけば水の音がなり

悪政へもう麦秋が死語となり

大阪市 木 村 水 洞

大阪で産れ帰郷の味しらす

勝っている野球は雨も気にならず

美男子の夫に添うた不倅せ

世話好きがいて葬式無事に済み

下関市 石 川 侃 流 洞

晩酌がすんで一日矢の如し

老いてまだ子に従わぬ金があり

飲めばすぐ眠る夫で恙なし

事なかれ主義も七人敵を持ち

京都市 松 川 杜 的

大池寺(さつき寺)

アングルを下げて砂紋の呼吸を撮る

七色の竹ありさつきの匂う古寺

《信案》にて(二句)

五百羅漢の表情に似て狸群

ウエルカムそんなポーズで大狸

藤井寺市 西 いわを

ひっそりとすれば眠けも出る昼間

同情と云う言葉さえ物憂くて

浮気でもしまほかと云う仲居さん

豊満な女思わすバラの花

東大阪市 久米 奈良子

霞乃先生より

おん文は慈母のみちびき筆ぬくし

紅させは朝一番の顔となる

木洩れ陽よ青葉の風よ指話はずむ

鍵合わぬ月日へ鈴の音が残り

神戸市 仲 どんたく

朽ち果てた家がここにほしい画家

闘争史で綴る夫婦の共白髪

意気合うて舞台がせまい親子獅子

湯の山温泉行

御在所の地蔵は霧をけむたがり

大阪市 児島 与呂志

鳴りもせぬ口笛吹いて見たい野辺

アスファルト打ち水はっしりはね返し

突き当るたんびに蟻はあわてとり

人生の長さは己れだけが知り

大阪市 有信 新之助

はつらつと大人のチエをもため肌

あるときは淫らにゆれる肉が付き

妻長けて船頭二人の家になり

雲ひとつ話しかけたい寂にいる

大阪市 天正 千梢

常識的な意見で物足らず

物価高へねずみの肥満たい  
終着駅かすかな後悔抱きつつ  
皮ふ細胞がステレオ吸収し

米子市 林 瑞枝

ハンドルの妙味ひとりの詩があり

船酔いの旅の苦勞も思い出に

娘のGパン二十歳の曲線みせて笑み

学歴へ惚れたお見合い娘は乗らず

大阪市 河野 君子

再出発へさて此の色を落とさねば

盆栽の芽摘んで自責の朝に堪え

水鏡見果てぬ夢がその奥に

魚ぎらいに追い打ちかけるPCB

守口市 村田 瓢太

仮りの世といえど執着するもの多き

もう一人のわたしがみつめている鏡

ある日ふと老化認めた顔のシミ

かけがえない地球と言いつつ垂れ流し

大阪市 今西 章雅

凋落へ打つ手打つ手が裏目に出

かさの餅子のない伯母の満中陰

飯場の壁にベタペタ裸婦の像

六十才女の膝はまだ丸く

尼崎市 高津 徹也

風香る 種も仕掛けもないように

ブルドーザーへ 燕一旋また二旋  
齒ごたえのある竹の子よ 春終わる  
抽象的な微笑たくわえて貴賓席

鳥取県 清水一保

書き足りぬ心追申でも癒えず  
やるせなき孤独の感に句誌を解く  
目に青葉心は未来までも馳せ  
過ぎ去った過去へ若葉のすさまじく

西宮市 藤村 べ 女

酒が好き三味線が好き夜の父  
雑草の強さ美事に五人の子

靴ペラをしようてお世辞まだ続き  
プリンゼリー作って楽し孫が居り

倉敷市 藤井 春日

新緑を流れに映し箸をとり  
男純情女打算の世と変り  
算盤ではじき出されぬ恋でした  
雑草に生きる悦び教えられ

西宮市 島居 百 酒

盆栽を小さく育てる嗜虚性  
ペランダに四季の自然を息吹かせ  
その悔が水子地藏に掌を合せ  
筍の風味懐し総入歯

松江市 舟木 与根一

死んだ娘と同一年また嫁にいき

引き出しの奥までながい梅雨に入り  
尼氏句碑にて(二句)  
夕陽の詩へすばらしい茜さす  
とこしえに四季の夕陽を読みつづけ

守口市 羽原 静 歩

出雲路に遊ぶ

安来節人の情にとけて来る  
灯台の夕陽へ盃おいたまま

尾道千光寺

文学の道しらじらと朝焼ける

瀬の浦

鯛網のたっぷりしぼり春の幸

兵庫縣 河原 みのる

獲物運ぶ蟻は知ってる押しと曳き  
赤い実は誰に許すの刺戟

侵されずおかさず象になりたいナ  
あきらめという言葉の自己陶醉

倉敷市 野田 素身郎

作文でみる中一の子は大人  
ある誤解僕の人生狂わせる

十年前の地名で呼んでいる帰郷  
ホステスMの無口を愛している無口

松江市 柳 楽 鶴 丸

問答無用今日は私の誕生日  
健康管理女盛りの妻がいる

一服のお茶へとけこむ静と動  
妻あわれだんだん乳房が小さくなり

出雲市 原 独 仙

生きのいい刺身が誘う昼の酒  
梯子酒の癖へ佞びしく従えり  
柳縁の握手に籠る人間味

句碑除幕その後

観光に愛撫されてる石に艶

岸和田市 福 浦 勝 晴

母一人子一人スキ鍋煮えつまり

怖いほど真面目になれと老母謂い

天平の貌で大仏すこやかに

うっとしい雨の日嫌なピラをくれ

岡山県 出 原 敬 一

贅肉の女に似合う帯の中

蒸発をうらんで男葱に泣く

下宿人不倫の夢を抱いて寝る

女房の敷いたレールを駄馬はしる

富田林市 岩 田 美 代

まだ馬鹿になれぬ若さが少うしあり

現実を見る眼は片方だけにする

まあまあの男やったと見合いミニ

兄急死

兄嫁をゆっくり泣かせる部屋が欲し

竹原市 時 広 一 路  
赤信号ついた理性へ眼をつむり

熔接の火花へ散ってゆく邪心  
一いくら掛けても数字交らない  
満たされた女を狙う隙間風

京都へ旅行(一句)  
箕岡市 松 本 忠 三

法衣着て運転してるのも京都  
もげ節の社長へ万雷の拍手  
他人様の戒名にまで批判をし  
爛ざまし集め末席だけの宴

大阪市 中 川 滋 雀

有りそうで無い青山の影を追い

人生の補欠に夢をあたためる

墨をするしじまにとけてくる写経

死んだ娘はいまどのあたり星の数

平田市 久 家 代 仕 男

休日の手綱は妻の御意のまま

悲しみに耐えてこころの傷を縫う

ようしやべる女しやべらぬときは食い

浮草の流れに淀む旅もあり

岡山市 川 端 柳 子

あどけない寝顔心の刺を抜く

子らが誇る老母は小さくしおらしく

あじさいの咲く頃悴せ言うてくる

羨望の目に風船の旅のどか

岡山県 嘉 数 千 代 香

働き蜂ご出勤 朝のベルが鳴る  
落日の挽歌を五線譜に乗せる  
温かく厳しく枯野に亡母が佇つ  
あきらめた心がしまい風呂で泣く

倉敷市 小野克枝

十字切る人に過去ありうしろ向き  
執念を捨てて仏の顔丸む  
病むときの優しさ胸にたたみ持つ  
黙す愛 凛々 鈴の鳴らずとも

大阪市 江城修史

孤独もう馴れて友との距離を置く  
情もろい男が義理を重くさげ  
父の日の父の素顔を信じよう  
まさぐれば昂る老いの残り火よ

東大阪市 宮西弥生

辛口になって女へ歩を向ける  
肩書が重くなって愛渴き  
妥協から城くずれゆく地平線  
偽りの肚をかくす日の演技

竹原市 小島蘭幸

ボウリングぐらいと母のサウスポー  
握高く義理人情を寄せつけず  
パイ囲む父子に断絶などはない  
働いて飲む大ジョッキ大ジョッキ

竹原市 森井菁居

原点の不覚は消えず波紋の輪  
どうしても言えない事が言えて母  
怒る日も無くナメクジの無視される  
他人様とくらべ貧しい心抱く

広島県 高橋鬼焼

土におう少年の汗農をつぐ  
さよならが消えて静かな灯にかえる  
野良犬を叱るに石をにぎりしめ  
明日のある少年歩巾くずすまじ

大阪市 黒田真砂

人生の十字路越したまま迷い  
まだ燃える炎を秘めて女の目  
プリントが溢れて夏を満喫し  
人形劇いつとき夫も子も忘れ

東大津市 村上春巳

古里を残す版画の水車小舎  
D51の汽笛わびしく旅終る  
母の日の幸せリボンほどくとき  
復元の殖輪ドラマを語り出す

松江市 小林孤呂二

あれだけの努力番狂わせと人は言い  
奢られて奢って敵のない余裕  
政治に疎いが「国盗り物語」好き  
老い兆す壺の欠けたも惜しむなり

宇部市 平田実男

昇進の辞令をエリート軽く受け

庭を築いて

庭石の位置は飲んで見喫うて決め

苔のむすまでと庭石妻と見る

ママの夢こわしたくないから通う塾

羽曳野市 大 峠 可 動

つまずいた路傍で泣けば負けになる

いのちとや鈴を鳴らして走ろうか

貧しさの底で手を取る夫婦かな

人が人恋うて波紋と対話する

島根県 景 山 綾 美

老梅のちよぼちよぼと咲いてよし

かげろう燃えて過疎の昼 音が絶え

ピラ貼るなよ機関車が泣いている

貼ってはぎ はいではるピラ 勞使不信

樞原市 岩 井 本 蔭 棒

子を亡くす悲しみ君よ僕も知る

羽振り良い方が呼びとめる久しぶり

先生の上げ足をとる記憶力

結局は親に貰うた名に戻り

島根県 大 森 孝 華

美しく老いたき自己を悟りかけ

思い切りピエロとなった過去に触れ

孫と踏む母校の土はあたたかく

ちまき巻く孫の笑顔も入れて巻く

鳥取県 川 崎 秋 女

壁破る何か何かがほしい日よ

街中を沸かせ六十の恋実る

譲歩する心へ平和ついて来る

母となるころしっかと娘につたえ

諫早市 原 田 明 春

もう一押誰かに押して欲しい縁

金貸しの顔だけ温かそうに見え

親方の声はどこでも良くひびき

祝電の披露へ咳を一つ添え

島根県 中 島 英 子

見るだけの茶室で雪舟の軸をほめ

五本松リフトにつられて老い忘れ

三瓶への近道トンネルの灯り映え

お薬もバッグへ忘れぬ旅終る

氷見市 関 美 子

タレントの指美しくやせて夏

帰省子へ寛は朽ちてとぎれがち

優しさに縛ばられ貧しき貞女でい

凡々の日なりに仮面つけている

大阪市 藤 田 頂 留 子

補欠選挙(一句)

ともかくも言いたいほうだい言える国

人それぞれコンニャクの裏表

サロンパスの匂い若さを選ぎける

沈没の日本みすてる物価高

島根県 梅

みどり

胎動へ女なる強さ抱きしめる

心の目開けば空がすき通る

打ち水の心づかいに靴をぬぎ

嫁った娘の部屋にやたらと灯りつけ

東大阪市 竹 中 肖 二

大阪のこんなところに菖蒲園

四阿の道をせばめて咲く菖蒲

関東煮 男はコンニャク召し上れ

釜カ崎こが残渣の吹きだまり

東大阪市 竹 中 綾 女

雨の日にも一度来たい菖蒲園

菖蒲園画く人へ人垣作る人

ガス値上げの説明会でまるめられ

喜びが重なり過ぎた日の不安

八尾市 飯 田 悦 郎

さわやかな女分厚い靴をはく

髪洗う女のように男なり

海愛し村に貧しい網を干し

鳥取県 鈴 木 村 颯 子

蜘蛛の糸隣りと結ぶ扉を越え

保守的なところに君の老を知る

神さまに死ぬ順番に並ばされ

夕餉沈黙 暗雲低迷す

風紋の風よお前も芸術家

新宮市 大 矢 十 郎

軒貸せばいつ匹くれた金魚うり

マイホーム首へローンという真綿

髪振って世はバラ色の口答え

焼香へ珠数は心と別の音

三重県 川 上 大 輪

コンパクト女は罪を持ち歩き

熊野路

黒潮の流れ妥協は許さない

(那智の滝)

滝仰ぐ皆善人の顔になり

仏像に見とれ賽銭あげ忘れ

堺市 高 橋 千 万 子

髪かたち顔まで変えて色直し

金屏風夢一ぱいへ反射する

出来心だった女と結ばれる

合わす歩へ二人は別な事思う

倉敷市 能 登 原 白 水

時たまに変わる心も持ち合せ

太陽のおこぼれ貰うビルの谷

こぼれ雲従者の如くあとを追

子育ての素顔ダイヤのごと光り

大阪市 西 川 誓 二

紫陽花が風情添えてる梅雨の庭  
娘の欲は別居の出来る嫁先

出雲路へ旧婚旅行

結んでくれた出雲の神へ久しぶり

出雲路に三十年の夢叶え

呉市 槇田英詩

山にいてこそ山百合の奥ゆかし

伊勢えびの眼に人間が曲ってる

柘榴の朱に魅せられるのも男

愛悲し女が夜叉となる破局

島根県 小砂白汀

肩書きを捨てれば毛胫だけのこり

曲りたいのをジッと耐えてる飛行雲

人間が二東三文に棲む団地

過ちを許すつもりの消しゴムよ

富田林市 和田維久子

額縁の黒リボン解く手の重み

お薄の泡賞めて娘を下見する

揺り籠の寝顔へ未来の虹ゆたか

崩れそうに見えて巧みなかわしよう

東大阪市 桑原喜風

恍惚と云われたくない靴を履く

風向きを電話でただし飲み直す

ささやかな愛老婆の肩叩く

お茶漬でよいさ笑顔で寄る夕餉

大東市 土岐トク子

人裁く身も小さきみに震えおり

青葉越しビルに小さく社旗のたつ

今宵きくシヤロンの花に酔いしれる

遺影の瞳かなしくゆれて午前二時

笠岡市 高木桃里

母ひとり娘一人噂さの絶えぬ灯よ

終バスで無事お見合いをして帰り

あじさいが好きで和服の雨おんな

松江市 岡崎祥月

地球ぐらつく日本列島岐路に立つ

空想を抱いて実現遠くとも

平凡の凡になり切る努力する

笠岡市 木山遠二

口笛を鳴らし童心失わず

若者に敗けぬ気だからくたびれる

男性的の梅雨 紫陽花を打ち叩く

愛媛県 渡辺暁童

女ばかりの きついもんちやく

人を得すぎた 遅刊延刊

地蔵和讃に 水音も絶え

姫路市 梅谿庵不醉

土の日をどうかえてやろ七曜表

お師匠さん一枝添えて花が活き

あんなだけその手で僕は何人目

伊丹市 小川 静観堂

瞳と唇だけで唯物的の愛

カナリヤには水を 僕にはリキュールを

赤潮は俳句歳時記の春の部に

岡山県 池田 古心

平凡な生活幸あり釣りマニア

手鼻かむ癖がネクタイしめた日も

三文の損なら安いと九時に起き

京都市 都倉 求芽

紫の深さ映して菖蒲佇つ

染屋の手離れりやカタカナの色になり

街の灯に痛み残して発つ夜汽車

堺市 藤井 一二三

クラーの音うるさいと聞くひがみ

百円の無力を老母まだ知らず

老母折れた無念か撞木の音が洩れ

鳥取県 森田 布堂

何を食えばよいのか汚染のニュース聞く

ジツと我慢などと平気で叱られる

送金も増額してと子の便り

姫路市 大江 秋月

あご撫でて雨の日曜もて余す

国なまり派手に団体さんが降り

ボーナス日せめて外食妻をつれ

岸和田市 葛城 伊三郎

言い放題したい放題子も真似る

向うから折れて誤解を笑い合い

撫子も桜も只の花となり

羽曳野市 塩満 敏

山半分食べて碎石場は移り

血圧が低いにしては温い男

僕でなくてよかった帽子とび

大阪市 水谷 竹莊

包丁の年季自慢の生造り

一幕を残して帰る友白髪

再入院

辞世の句よむには少し早過ぎる

小松市 馬場 魚山

鯉のぼりの場所を犠牲にした車庫

万引と察した機知にある年季

チュートリップ開けばそれで絵にならず

広島市 山田 季賛

ハッターリを言う上役をもて余し

上役の話に耐える不倅せ

銃持った自慢先輩に聞かされる

八尾市 大路美幸

酔うて帰り内職の花眩し過ぎ  
海峽の灯も酔うてくる一人旅  
三日月が酔うた心に突き刺さり

大阪市 本庄金三

折れ合いが付いたか姑膳につき  
恍惚の人振り向かぬ小半日  
夏の夜の冷コー一杯寝つかれず

富田林市 浅川八郎

人間のエゴサツキ語らず花競う  
ペランダの雲の流れは短かくて  
奥様より今日の短冊泣けて来て

枚方市 宮川珠笑

前ヒレを急ブレーキにして鯉が寄る  
団地にも季があり新茶つぐ夫婦  
出張の長期へ美人多すぎる

大阪市 室谷徹舟

券売機値上げの愚痴に耐えている  
稽古台ただの散髪寝て居れず  
愛情過多盆栽の根が腐り

大阪市 飛田好一

貫録を示す虚勢の肩が落ち  
言いたい事言えて自由の世をなじり  
反対をすれば革新色に見え

倉敷市 竹内翁童

尊気にせぬとき女のたくましい  
越えてきた山河にもしや倅せが  
清貧のしわ権力におもねない

倉吉市 渡辺菩句

男装をすると美女に見えてくる  
夢売っている好きなストリップの娘  
娘のような娘に漫画本読んでいる

大阪市 神田秀峰

女房の背信沈黙の日が続き  
目には目を幼児も五分の反抗期  
スト慣れに来客の顔無表情

鳥取県 谷無閑

祝電の一つに花嫁ドギツとし  
物価高派手かも知らんと出して着る  
スタートもないが終点もない百姓

愛媛県 村上旭童

降りそうで降らず一日おちつかず  
先生に言うてやるぞがもうきかず  
だれが売るものかと土にしがみつ

生駒市 草深醉升

ほんとうらしい嘘真顔で聞いてやり  
長者番付働くことが馬鹿みたい  
せめてもの猫のひたいで鍬を振り

松原市 玉置重人

車無いのに排気ガスだけは吸い  
血のにじむ金が水引かけて消え  
しようむない時良心にささやかれ

東大阪市 齋藤三十四

説得へ少し表情和らげる  
新緑へ釣れても釣れいでもよい  
流心を除けて還暦の歩巾

新宮市 小林入道

豪華な旅とは新幹線に乗る話  
寺つがず七つの海のパイロット  
一鉢をもらってからのサツキ狂

八尾市 古川鶴声

現在を生きるに明治は迷わされ  
連休パパ疲れをほぐす出勤簿

北川春巢

母の日父の日デパートに感謝する  
フェミニストですと機嫌のよい日なり  
帰郷して都会の無名性を恋い

さすが名優アツでも酔うた顔  
助産婦の腕(かいな)の太さ頼もしい

川村好郎

億のつく脱税記事で朝を出る  
変化球女心をたしかめる

父の日の遥かからむ蔦青く  
万緑へ云いたいことも秘めしまま  
別々の思い出ナツメロ聞く夫婦

母八十九才心臓麻痺で死去

さもあれば 遮莫上手に母は逝きにけり

臨終のない死に死水あわてたり

堪えに堪えし嗚咽の堰の別れかな

灯明の奥に母あり梅雨の室

晴れやらぬ梅雨の心を今日も持ち  
公害のないとこへ母は逝きにけり

菊沢小松園

泣き寝入り遠い所の医者にする

誘蛾燈ここで果てると思つてず

泣いて居る方が殴つたと親知らず

世間など気にせぬ音でジャンボ発つ  
神様に時々脳をいじられる

若本多久志

韓国の旅

妓生も石仏もよし韓の旅

千年の古都に新羅の衰史聞く

古都慶州廢仏毀釈の跡寂し

武烈王静かに眠る土饅頭  
石仏を巡りて心和む初夏

西尾 栞

# 川傍柳 初篇研究

(百二十一)

前田喜代人 川端柳風  
 故  
 岡崎重義 高須啞三味  
 故  
 清博美丸 十府  
 藤井和雄 岡田甫

707 いゝすゞみあたまの上をあるかせる

眠狐

川端||前句と全く同類句。船と橋上との対比句として、

降り出すと屋形でにくい口をさき

一・一・九

いい降りだなどと屋根舟にくいこと

一六・七

屋根から人と思はぬ橋の上

二・二五

高須||「屋根でかけっくら」と「頭の上を歩かせる」の違いだが、本首にも

らんかん人にをならせるいい涼み

傍一・二一

があったのを諸君はおぼえている筈である

丸・岡田||贊。

708 間男の母これきけよく

菅江

川端||母親の意見。「見つかれば五両もとられ、斬られても文句の云えないことだよ、あんな亭主持ちのふしだら女と……」とくどくどと意見がつづく。

高須||女ぐせのわるい男の母親の心配。売り買いの出来る女はいいが「間男だけはいない」と母がクドクドと意見をしているのである。「これ聞けよ、これ聞けよ」がそのクドクドとしている強意見の表現で、切実にひびく。

前田||「間男の母」にちよつとひっかかる。間男をしている女の母ではなかるうか。

したがって諸説とちがって、意見の相手は女。この方が「これきけよ、これきけよ」が活きる感じである。

清||前田氏説のように間男をしている女の母だとすれば、一般的にいって姑ということになるが、姑と嫁ではとてもそんなのんびりした会話をしてはられない。礎稿に贊。

藤井||高須説に贊。女郎買いはしかたない

丸・岡田||同右。

709 松根を皆かんざしであらす也

川端||

川端||「松根(しょうこん)」の松は既出、きのじ屋の台の物。あらすのは禿であらう。

川端||吉原の喜の字屋は、もう数回出たので説明の必要もないが、台の物の真ん中へ松の木を飾って「高砂の松」に見立てた立派なもの。

松根に倚ってかんざしで食らひ 筈四・二八

高須||吉原の喜の字屋は、もう数回出たので説明の必要もないが、台の物の真ん中へ松の木を飾って「高砂の松」に見立てた立派なもの。

松に食べ物あしらい一分なり

その「たべもの」を、カンザンであらすのはオイラン。禿などやたらに台の物へ手を出しはしなかったはず。

岡崎||吉原では客の酒がすむと、そつと、かんざしを箸がわりにして料理を平らげるのがおきまり。客がすすめても座敷では「たべせん」などいいながら、客の目がないとき、ひもじい盛りの新造など、夜ふけ人しづまり肴あらす也 傍二・一七

寝たふりで見りやひじき迄取くらひ 傍三・二七

礎の側にあれ切った台の物 傍三・三三

ということになる。

前田||かんざしであらずのは、おいらん、かむろ、やり手などと限定しなくても可。

岡崎説の通り、酒の座がすんだあとであるから、寄つてたかつてあらずのである。

藤井||岡崎説に賛。「松根」は謡曲「高砂」の「松根によつて……」の文句取。

丸||同右。「松根」は藤井説の如く謡曲高砂の文句によつたものと断定してよい。

松根によつてまどろむ礼の供 一三・24 岡田||同。

710 金ンや角ク座敷へまいて中力たがい 五 扇

川端||「金や角」は将棋の駒。「待て」

「待てぬ」から、ついに取っ組み合いの喧嘩になった。囲碁・将棋に見られる風景

で、当人同志が真剣なだけに傍で見ていると滑稽である。だが、しばらくすると、

碁仇は憎さも憎しなつかしき 初・37

で、日ならずして仲直りし、そのうちまた仲たがいを繰返す。

高須||将棋をしていた二人のケンカと見られるが、「金や角」が貨幣の「におわせ」という柳雨説にも何かあろう。ただ将棋の

ケンカなら「銀や飛車」でもよいのだから岡崎||カケ将棋とも見られないことはない

が礎稿賛。

清||将棋友だちの仲がよすぎる喧嘩とする方が柳味がある。

藤井||礎稿に賛。金角は別に意味はない。

丸・岡田||右同。

711 小附ケめし下戸べろり喰く

眠 狐

川端||「小附飯」は「小漬飯」と書き、湯漬飯のこと。句意は酒が飲めないの

で、湯漬飯をどんどんたべているというだけのこと。

高須||「今の俗に、かりそめの飯を小漬飯という」(類聚名物考)で、

出合茶屋恋の重荷に小附飯

なんて句もある。——下戸だから飯をべろりべろりと食うので、上戸なら酒をガブガブ飲むところである。

岡崎||賛。べろりべろり食うのでなく「べろり喰べろり喰」がおもしろい。

前田||「べろり喰、べろり喰」は下品な下戸のしぐさが出ていている感じ。

丸||諸説に賛。

岡田||宝暦のころから江戸に、小附飯や太平ひっぱくの店が出来て流行した筈だが、

平臥中で調査できます。「小附飯」は簡単な副食物をちよつと添えたお茶漬のことらしい。

712 薬礼に出た金斗十九両

岸 口

川端||薬石効なく、医薬費十九両も使つて

劳咳の娘は十九才の若さで死亡した。十九才の厄年に十九両を利かせただけのこと。

「斗」はバカリと読む。高須||女の大厄、十九才をきかせた、ほん

の小手先のつまらぬ句

薄墨で昨十九日娘こと

と句型句、とにかく「金食い病」の娘に死

なれて、家内中なげきながらも、一応ホツとしてゐるところであらう。

丸・岡田||賛。

暑中お見舞い申しあげます

### 川柳初篇研究

グループ一 同

岡田 甫 著

## 川柳東海道

上巻・750円  
下巻・850円

上・日本橋から大井川まで

付・鎌倉・伊豆史料めぐり

下・大井川から京都まで

付・尾張・美濃の史跡・伊勢路・琵琶湖めぐり

### 希望の下巻絶賛発売!

江戸の庶民詩(川柳)片手に、東海道五十三次の長丁場を足で描いた『道中記』

弥次喜多時代の東海道、その時代の旅人の姿を髣髴させる異色作!

(最寄りの書店へご注文ください)

読売新聞社

「ジョニーは戦場へ行った」という映画をみた。昨今のちやちやなテレビドラマなど、およびもつかぬその感動の名作であった。私がかく絶賛してやまぬ心証の名づけには、私がこの主人公と同じ軍衣をまとい、同じ冷たい軍用ベッドにも身を横たえた傷病兵だったからである。

第一次大戦の激戦つづく荒野の壟壕の鉄条網に、引つかかって死んで腐爛した一人のドイツ兵の悪臭から免れるため、数名の兵士が軍命でとり除き土中に埋めた。ところがその作業が終った直後、敵の重砲の一弾で、一人の兵士は粉々に引き裂かれ後方の戦病に収容された。両手、両足、耳と眼も口もなかった。その一個の物体に過ぎない人間の生きている部分といえば、それはわずかに原型を止めた、黒い頭髮の中の脳神経だけだった。顔を掩う角形のマスクの底には、まともなら二十歳をわずか過ぎたみずみずしい若い貌がある筈であった。これがこの映画の主人公ジョニーなのだ。

映画はその生きている脳髓だけの肉体が、むごたらしい現実と過去の想い出の幻想を交錯させ、適確な表現力に溢れたナレーションによつて展開していく。現実には蒼い白黒二色で、幻想の場合は眼にしむばかりにあざやかな色彩場面だ。幻想は青春の輝やきにみち溢れ、恋人とのめくるめくばかりの愛情の交歓。陽のぬくもり、文字や言葉のなつかしさ。太陽が水が、木々が青空が、あらゆる人間のユーモアと風

刺を織りつづつて哀歎の限りをつくして、一個の物体の脳細胞をかけぬぐる。

だがこうした人間をつくり出した現実とは一体何なのか、この作品のテーマはかくして烈々たる反戦の訴えとなつてわれわれの肺腑に迫る。

第一次世界大戦が終つてから十五年近く、こうした肉片の状況のもとに生きつづけたイギリス将校の實在したのをヒントに、ドルトン・トランボは一九三九年に「ジョニーは銃をとつた」を書いた。この映画はそのトランボ自身の監督作品なのである。小説から三十年ぶりの映画化なのである。

ジョニーだけではない。私も戦場へ行ったのだ。この感銘の底で、私は幾度もそう叫び出すところを、傷口をおさえた。そのおさえた後味の虚しさが、白々と氷のような冷さをもつて迫るのは、肩口近くからその肉体を喪失した、私の右腕の切株だった。

「上等兵殿、さあ、こはスチーム付の別荘地。ふんわかふんわかとして、ほんまによ

## ピンクのリボン

東野大八

ろしまつせ、もっとも赤い長襦袢のネエさんは本日は公休日ですがね」

そういつてその補充兵の一人は、大たき火の跡をきれいに始末して湯気の這う地べたのそこへ携帯天幕をさつと開いて敷いた。

「成程、此奴は天好の甲だ！」  
ごろりとそこに横になるなり私は叫んだ。

「別口にちゃんとかタツもおまつせ」

たき火のどまん中に据えておいたという、大きな石まで外套の間からさし込んでくれるのである。召集まで大阪でコックだったというひょうきんもののそのM一等兵。

その彼と久しぶりに出会つたのは北京の清華園陸病だった。百人もの傷病兵が目白押しの大ホールの中に、彼はイモ虫のように転っていた。まず異様なのはその貌だった。片眼をぐるぐる巻にしているのはいいとして、その顔面に鋼鉄のカゴをしっかりとめ込んであるのである。その無気味な錆びた面であつた故に、通りがかりの私の眼にとまつたというべきだった。思はずのぞき込む私に、白い隻

眼がやにはに光ったとみえた瞬間、うう、と  
その相手は獣のようにうなり声をあげた。

「おお、お前は……？」

絶句した私に、相手の口には頑丈な草具の  
紐がちりちりとかけられている。私はとっさ  
に口輪をはめられた精悍なセパードの貌を想  
い起した。うう、と烈しく首をふりながら彼  
の片眼から涙がどつとほとばしった。

(口惜しい！)

その想いが語らずして私の肺腑をぐざりと  
つき刺した。(ここにいたのか)といったつ  
もりが私の声にも声にならない。私は顔をそむ  
けて汚い彼の毛布のふくらみに眼をむけた  
が、そこは小さい子供ほどのふくらみしかな  
い。私は何気なくそこをねてみて、思わず  
慄然と総毛だった。彼は両腕と片脚がない  
のである。残った片脚とそれはポロにくるま

## ダイヤルは

高鷲 亜鈍

ダイヤルはりととが遠すぎる  
話中長かったなと次の声  
代筆代読頼まなくても良い電話  
齡経ても大事にしたい旧い友  
こつく手を払いのけつつ長電話  
居ながらの電話已れを甘やかす  
電話番社会復帰になるならん  
留守居後ダイヤルをまわす暇な指

った丸太ん棒さながらなのである。私の視界  
はたちまちのうちに湯のような熱いものでい  
っぱいになり、それがやがて滝のように噴き  
上ったのである。

「上等兵殿、わてはこんなカニ料理の、一  
本足のカニにされましたんや」

コック上りのイナセな彼の声が、ポロ切  
れの重い一本足からきこえてきそうであっ  
た。

映画のジョニーのベッドの身体は、M一等  
兵とそっくり同じほどに小さかった。私はそ  
の身体から、Mの音がサウンドでいっばいに  
反響してのしかかってくるのを感じて、思わ  
ずはげしく身ふるいした。

鉄ボーのタマには眼鼻はない。一直線にけ  
し飛ぶだけでなんの意志も分別ももってはい  
ないのである。その進行方向に横たわるもの

女房の電話いつでもくだらな  
覚束ない手で声つかむ

かけてこいとひとりふたりにハガキ  
夢ならず闇に声ありひらめけり  
闇に座し言葉の渴きをいやすべ  
れ往けず来せせめても声に縋りたい  
ベルしきりそれはテレビの中である  
二度三度社長只今居りません  
前もって電話するのはよしあし  
かけるのは息子に気仕ねかけてくれ  
無駄は止せ選挙運動証券屋  
愛すとは無償の行為与えることだ

の肉体の悲劇。その中に男子の象徴がぶら下  
っていた例もある。いぼ蛙の股のような身体  
で、ふやけた葱の白根の一本のように彼は死  
んだ。(おけりやあ、カアちゃんにすまんこと  
をした) というのが、袋をなくしてから死ぬ  
までの彼の口癖だったのである。

M一等兵は、飛ばない火砲地雷にやられた  
のだが、戦場の死に損いの私は、その地雷の  
炸裂の瞬間のすごさを一度だけ目撃してい  
る。

「何やってんだ、そこの寝ている兵隊！」  
私たちの分隊にそうどなりつけた馬上の将  
校が眼の前を通りすぎていったとみた直後、  
ドカーンと腹と背骨に響く凄絶な一発が起っ  
た。とたんに馬が半分になった。尻尾をゆる  
く片方へ振った尻だけのその馬は、二歩ある  
いて、はじめて横ざまにぶっ倒れた。馬上の  
将校は、嘘のように空間に消えうせていたの  
である。だが、その頭上にあつた並木のアカ  
シアの一本の下枝から、ゆっくりと何かが重  
たくせり出してきた。やおらあつて、どたり  
と地の上に鈍い音をたてた。それはキラキラ  
光る眼にしむばかりに赤い肉塊だった。

五体満足な傷病兵もいる。彼の片方の肩先  
には、ピンクのリボンがいつもヒラヒラして  
いた。ニタニタ笑っていると思えば、突然

「前方立木右に指二本、射てッ！」

いきなりその怒鳴り出す将校。終戦も十日  
目の八月の陽が、その男の尖つたアゴの下の  
汗を弾いていた。このピンクのリボンは、ジ  
ョニーよりはるかに幸せな兵隊なのである。

# 8月15日(終戦の日)あなたは

## その日どこで何をしていましたか？

### 八月十五日

#### 福井野迷路

で当分はまあまあ所らしいが、左の決論ではないかと思う。

米ソではブレさん頭を余計下げ(野迷路)

#### 異国の放送局で

#### 小川静観堂

十六日になって、それが終戦ではなく、敗戦の意味もわかり、泣くに泣かれず毎日、放送局へ通ったものだ。ジャワの美人踊り子二人を日本の宝塚へ送る約束をしていたことも水泡に帰した。

——ゲンコツで泣いたあの日がめぐり来る

静観堂

#### 終戦日の私

#### 小西無鬼

八月十五日に私は海軍現役で呉海軍病院長兼呉海軍鎮守軍医長でありました。丁度呉と日と鼻の広島原爆で上を下への大騒動の最中だった。原子力を兵器として使用し得ることは大戦に入る三カ年程前から、海軍造兵官(海軍兵学校出身でなく東大及び京大工学部出身の学者)に聞いていた。原子核反応はユダヤ系英米学者によって開発されて居たのである。

広島原爆は終戦兵器だと国防会議で主張したが、甲論乙駁の最中に長崎の第二弾を受けてシャッポを脱いだ次第であります。爾來廿八年を経過した今日、核エネルギーの進歩は地上生物の絶滅を恐れて核兵器制限と開発に狂奔する有様である。

今回のニクソン、ブレジネフ両主脳の会見

戦争に勝ったら、三笠宮殿下は南太平洋オーストリアの皇帝になられ、ジャワスラバヤ陸軍病院長小川大佐はオーストリアのどこかの病院長になるんだなどと冗談を飛ばしていたのに、八月十五日朝になって玉音放送があるから、放送局へ部長集合とのこと。

私は小学校、放送局、劇場などに関係があり多忙をきわめていたが、この放送はハッキリ聴えず、「戦争は長びくから確っかりやれ」とも、「戦争には負けしたが軽挙盲動はさげよ」とも………というような御論しのようなであった。放送局から帰院して将校を集め、いろいろ前後策を話し合ったものである。私の官舎には下士官兵五名が警戒にあたり、翌

九州長崎県有明湾守備隊の給与班長として臼杵郡有明湾の守備隊(大隊)勤務。私は給与物資調達に現地の農協、部落有力婦人会長宅を訪ねて物資をお願いして隊へ帰ったのが終戦の詔勅「らしいけどお言葉がわからん」が負けて終戦やらしいデ、と囁く隊員の声、停戦命令は未だない。敵兵有明湾に上陸すれば水際決戦の命は未だ双肩に重い。士氣そそう防止の訓令は厳。何か複雑な気持で

服務。矢張りあの原爆にやられたんだな、と思つた。翌日からの農協と婦人会役員さんの応接態度が急に冷めたように感じた。しかし自分は何と神仏の加護のイヤチコなるものよと深く感じた。第一次召集のバイアス灣敵前上陸、広東攻略にも弾一つ喰わず、第二次では長崎の原爆を浴びながら爆心を一寸離れての守備。全く不思議な神助と云うか、運命と云うか。「神様を鈴で起こして頼んどき」二十年前の実感句である。今感謝しつつ終日盃を重ねている。

## さて、あの日は

### 河村日満

ある日、桜島にあった高射砲隊の一つが、大阪駅方面にゆくB29をうしろから撃つたところ、これがうまく当って黒煙りを吐きながら河内方面へ落ちた。ところが、その翌日からお礼参りの爆撃が時間を決めたようになってきて、陣地は勿論のこと私達の動めていた住友金属をも徹底的に破壊した。そのため私は十名ほどを引率して平野（だったと思うのだが）のある町工場へ応援作業に行っていた。ところが八月の十五日、ご承知のとおり天皇陛下下の「みことのり」と共に戦争は負けいさ。そこで早速皆を連れて島屋町の住友金属まで帰った。と自分ではそう思っているのだ

が、記憶力が弱いというのか、応援に行つていた町工場の会社名さえ思い出せず、しかも平野だったかどうかとも、確信をもって答えられぬはずかしさである。

## やり直しの日

### 西出一栄

疎開先である出征中の実弟宅、富田林市本町で重大放送が始まるまでの時間を帰宅する夫や、遊びに出ている子供たちのために芋で「茶巾しばり」を作っていました。それはつかまえてころのない大きな不安をまぎらわせるためでもありました。

夫は六月一日に空襲で焼けたうちの工場の後始末にこのところ毎早朝より出掛けており重大放送までに帰宅する予定でした。

時折雑音の混じるラジオにかじりつくようにして敗戦を知りました。遅れて帰って来た夫は訳は知ったそうで「とうとう敗けたなア」とポツリ——二人共無言でした。めいめいの胸の中は余りに一杯でありすぎ、かえって一言も出てこないのです。

あとになって考えれば、なりわいとしていた工場を焼かれ、一生暮らせる予定であった預金は封鎖され、私たちにとってこの日はゼロからやり直しのスタートの日となったのでした。

## 高津川は今も流れる

### 臼井三林坊

島根県に高津川と云う鮎で有名な川があります。その上流に青原と云う小さい町いや村の小学校が浜田聯隊作業中隊の駐屯地でした。私はその指揮班に配属させられたのだが、二年前大阪で肋膜炎をやり生死をさまよった私が、一年保養後その翌年は軍人として毎日炎暑の高津川原の焼け石の上を逼伏前進の演習に明け暮れていました。その日も演習を終り高津の清流に汗を流す事を許され、身に浸む程冷たい水でしばらく戦友と雑談し乍ら自由を楽しんでいました。その時ある戦友が何処で聞いたのか、今日天皇がラジオで戦争を終結するお言葉があったそうだと小声で話しました。

まさかと思つて中隊へ帰るとそれは事実で、それこそてんやわんや、その夜から兵卒と上官の階級がなくなり、講堂に中隊全員集まって終戦は嘘である。吾々はあくまで戦うと号泣して一夜を明かしました。まさに日本がどろどろ音を立てて崩れ行く日でした。それは今も続いている。

お月さん残念ながら負けました

豆 秋

暑中お見舞い

申しあげます

川柳塔社

光を奪われて

堀江正朗

慰問袋も届かない前線を満州・北支と青春を戦い続け、傷イ軍人と呼ばれてきびしい人生の方向転換の中で、やっと三十六才の春、東京官立盲学校を終え「さあ生きてゆかねば」と意気込んで、ぼつぼつ仕事の準備をしていた。

「重大発表がある」との事でラジオの前にみんな集まっていた。古い上に電波が悪く玉音は、はっきり聞き取れなかったが、「日本が負けた」と信じられず、表へ出てみるとあちこち人が集って誰言うともなく終戦を知らされた。

緊張した茶の間で、何とも言えない涙が頬を伝い沈黙と化した中で、僕は大きな音をたてて、すべてが崩れるのを感じ、正座したままに何をどうしてよいか分らなくなっていた。「八月十五日」であった。

一つの安堵感

工藤甲吉

カンカン照りの日であった。私は北のさい果て青森県は南津軽郡の黒石という小っぼけな町で、いわゆる「地方記者」をうっていた。この町（今は市）は国立公園十和田湖の西口で、秋田雨雀を生み、遠くは京都の公家、花山院少将忠長も住んだことのある一万石の城下町。その日私はこの役場で今はすでに蓮の台の中山という町長さんと、あのいまわしき玉音を聞いた。七月二十八日夜の青森大空襲の模様などから不忠の臣はそれとなく我れ敗れたりを感じていただけに大して驚きもしなかったが、町長さんはさすがにガツクリだった（その時の舌打は今も耳底に残る）。あの日私はしたたかに酔った。それは、やりきれぬむなしさと、半面、これでどうやら死ぬこともなくなったという一つの安堵感が手伝ったことはいまでもなかった。

疎開先きで

高橋操子

岸和田から三里ほど離れた山裾の（現在の和泉市唐国町）叔父の離れ座敷を借りて疎開しておりました。八歳の長女と生後七カ月の次女を連れての苦しい生活でした。次女は離乳期でしたので、カユを作るためとほしい配給米、といってもその配給米にはいろんなものが混合されていましたから、米粒だけを選り出す苦勞はたいへんでした。米と握りの米粒を集めてカユを作り次女を育てたのですが、今おもうとゾツとするような食糧事情でした。こんな時、あの天皇陛下の終戦のお声を聞いたのです。あの複雑な気持ちは、経験した者のみ知ることだと思っています。

思い出

梅谿庵不酔

忘れることの出来ない八月十五日。村中で僕の家だけよりなかったラジオ、何事だろうとモンペ姿で老若男女が流石広さを誇っている僕の庭も人の黒山。村で一軒よりない位の山間のラジオ、でも天声はよく聞きたれた。耐えがたきを耐え、忍びがたきをしのび、一同は唾然としたのみ。僕は丁度盆でドウセ空爆でヤラれるのなら、せめて先祖の墓まいりをしようと思っていたが、暮へまいらぬう

ちに無条件降伏を聞いた。折角苦心して作っておいた竹槍の始末を考へることも出来なかつた。

## 「畜生め！」

西田柳宏子

午前十一時三十分頃だつたらうか、不気味な空襲警報に静まる部落实隊本部に急いでいる私の頭上に爆音が聞える。見上げる時の丸も鮮やかな零戦一機、ホッとした気持ちで歩を速めた瞬間、キーンと云う金属音と同時に機銃の連続音、ハッと振仰ぐ目に何時の間にも現われたかズングリした黒いグラマン二機が零戦の左右背後から襲いかかっている。

「畜生め！」唇を噛む次の瞬間パッと黒煙を吐いて急角度で下降する零戦、折柄空襲の爆装でもしていたのかそのまま静まる湖水に突込むや物凄い爆音と水柱……グラマン二機は勝ち誇った旋回をして東方洋上へ引揚げて行く。

何とも云えぬ気持で合掌して本部へ急ぐ。折柄空襲警報解除、十二時ラジオから流れた終戦の詔勅を耳に、数分前の零戦が痛ましく心に残る。

時、昭和二十年八月十五日。場所は次城鹿鹿島郡銚田町北浦湖北の一隅。奇しくも零戦塔乗者は地元出身予科練生だつたとか。

## その日の私

大路美幸

兵庫県立航空工業学校第二学年第一小隊、それが私の終戦の日の肩書です。当時、私は川崎航空機明石工場に学徒として動員されていましたが、B 29の集中的な投爆のため、工場の操業が不能になり、三木市へ転属配置されるため、指令あるまで家庭待機と言うことになっておりました。

正午の重大放送は、近所の人と一緒に聞きましたが、はっきりわかりませんでした。その後の放送により敗戦を知りました。何かわ

## 一分間の柳論

大同小異という言葉がある。柳志の富士山も大観の富士山も、唯見ただけでは大同小異だ。凡才の三年や五年の修業では気がかぬ小異の為に、一方は百万になり一方は紙屑になる。

俺に似や俺に似るなと子进行  
は名句だが「子を育て」では凡句になる。  
小異のもつ魔法であろうか。

日中復交に当って周首相は功を急いで、小異を捨てたのがたつて、未だに色々な

からぬいらだちが十五才の心をよぎりました。父は戦争に行つたままです。私は、死を考へました。

家宝の短刀をベルトにさして、裏山で死場所をさがしました。涙が止めどなく流れました。突然「美幸ちゃん」と呼ばれました。近所の M 子です。

私の終戦の日は、そんなに若く、甘い思い出しか残つておりません。しかし、真剣(？)に死を考へたのは、ほんとなのです。

## 終戦の日の思い出

横山一声

## 本多 柳志

実務協定がもたつている。それ見ろだ。考えて見ると凡人の思考なんて大同小異の句の中から、一寸した発想の違い、たった一字の小異の為に天にもなれば地にもなる。短い時間に大事な小異を見落せば、所謂盲選になる。結局の所作句にしても選句にしても、大同の中から人の気付かぬ小異をたしかに、見つけ出すところにこそ、云うところのコツがあるらしい。

京阪神の空を護る高射砲隊中部第四一六八部隊第五中隊に昭和十八年十月に入隊。神戸港の守備について居たが、再度の爆撃のため神戸の街は大半焼野原となつてしまつた。次の目標は京都ではないかとこのうわさ。二十年六月京都桃山に陣地異動が命ぜられ、乃木神社の近くの丘に陣地構築して待機して居たが京都爆撃はなく、各地の都市が爆撃された。八月十日頃である。B29一機が高度一万三千米で侵入、我々の高射砲は残念ながら最高八千米までである。上空から爆弾でなく多量のビラが投下され、日本国降伏と書いてあつたが、宣伝だろうと破りすてた。その後十五日に重大放送がある。謹んで聞けとの命令。全員正装して整列。ラジオから流れる天皇のお言葉、今だ忘れることは出来ない。隊長から最後まで軍の命令に従い軍人らしい行動を取るようにとの訓示があつた。長い長い沈黙が続いた。これから先き日本はどうなるのか、我々はどうすれば良いのか、現在のようなの、難い世の中、幸せな暮しが出来るとは誰一人想像出来なかつた。

## 終戦の日

奥谷弘朗

私は、終戦の日を旧満州国で迎えた。忘れもしない、昭和二十年七月二十三日、関東軍

最後の動員に引つかり、牡丹江省穆稜街の県公署官舎から、妻と三歳の一人娘を残して真夜中の出征だつた。

悲徳の一三〇八〇部隊第九遊撃隊に入隊したものの、半月たらずの八月九日夜にはソ連軍の参戦、しかも部隊長のM大佐は姿をくらまし、我々はソ連軍の戦車に追われて、平坦地を避け山中をさまよい歩いた。そのため、八月十五日の終戦の日を、何県のことかで迎えたのか、はっきりした記憶がない。結局最後は、戦友と二人きりとなり、満人の自警隊につかまてソ連軍に引渡され、昭和二十四年の引揚までシベリヤで抑留生活。内地で妻と再会し、かわいい一人娘を現地で失なつたときの、深い悲しみはいまなお忘れることができない。

## その日

垂井葵水

(何かが起りつつある……) そんな予感めいた気持ちもあつた。「日本が敗けたらしい」馬鹿にしてやがる。デマもいいとこだ。「外から帰って来た一人が妙に真剣な……こわはった表情で外出腕章を外した。(そんな事あるかい?)」と否定はしているもの何だか思い当りフシがないでもない。四五日前から街の空気が変なのだ。難民区を通る度に、いつも二

コやかな飯店の主人の顔から笑いが消え、屯ろしてはいる連中がまるで嘲笑するような態度をとりはじめていた。もう十数年前から姿を消している筈の法幣(米英系の銀行券)が急に出廻り、儲備券(軍票)の価値が下りはじめていた。蒸したての饅頭が五円で三つ買えないのだ。「陛下の放送がある」と連絡が入つたのはそれから二時間後だつた。私はコルトの手入れをはじめてした。中支派遣橋師団の梱包監視隊の……一兵として揚子江の南京漢口の間「九江」にいた。

## 米兵がこわかつた

天正千楯

大阪空襲に焼け出されて以来故郷の紀州の片田舎に身を寄せ、七月十五日二男を授けて頂いた。静かな田舎にも毎夜B29の訪問に明け暮れていた。八月十五日昼のニュースに耳を傾けると陛下のお言葉、聞き取りにくい放送がどうやら戦いに負けたと知り、ああ生きのびられたんだ、十月月音沙汰ない主人は生きて帰れるだろうかと、昨日までに死んでいった人達は気の毒だなあと赤い頬をほてらしながらおしめを洗っていた。広い田舎の部屋に知り合いの人達が幾組も疎開して来ていた。口々に興奮した面持で早や逃げごしらえ、女の人は皆山奥に入らないと米兵のおもちゃに

されると本気で口ばしだった。私も母の故郷の山奥まで疎開せねばならないかも知れんと考えていた。二人の子を守りながら主人の帰りを待っていたのは、二十五才の若さだった。それから一年三カ月後、胸と足を弾で突き抜かれ、前の歯も全部落ちてしまい病院船で帰って来た。二回の傷が二回共同じトラックと運転手とは不思議な因縁であると、今でもしみじみそう思っている。

## 子が身替り

飛田好一

終戦の日、私は第二回目の召集で九州におりました。陸軍工兵一等兵、独立工兵隊菊水班の一員として、福岡県飯塚市の国民学校へ九州防衛の任務をおびて駐留して居りました。当日は丁度衛兵勤務の日でしたが、「今日は陛下の重大放送があるから全員集合せよ」との命令で校庭に於て、陛下の玉音放送を聞きました。悲しいような、情ないような、腹だたいような、それで居て何かほっとしたような、ほんとうに複雑な気持ちにとらわれて居ました。初めの召集の時は、高槻の工兵隊におり、外地出征組に編成されて居たのが、長女の死去により召集解除になりましたが、後で聞くとこの時の部隊は船がやられ全員戦死とか。第二回目もあと一月もおそけ

れば、或いは九州で玉砕して居たかも知れないと思うと、復員後半月程して又次男を亡くしたのでは、子供が皆自分の身替りになつてくれたのではないかと、そんな因縁めいた事も考えております。

逝つた子の年ふりかえり終戦日

好一

## 漠とした記憶

久米奈良子

八月十五日の終戦記念日は日本人にとって忘れ難いその日なのに私の記憶は漠としている。まことにおぼろげな限りではある。

三月十三日の夜、大阪大空襲で罹災した私達一家は転々として結局母方の親類筋にあたる農家の離れを拝借していた。当時は奈良県添上郡井戸野という至極交通の不便な純農村である。女学校の卒業式直前に境遇が一変した。私は病身ゆえに将来の方針も立たず、家で母を手伝う毎日だった。焼けてからはラジオがなかった。そこへ何か重大な放送があるとのことで母屋まで聞かせてもらいに行つたことを覚えてゐる。その時、戦争は終つたのだという実感は湧いてこなかったけれど、カタカタと胸の中で崩れゆく音を聞いたように思う。空しさと悲しみが全身をかけたようにただあるものは、体の弱い母と私と家族だ

けだった。玉音放送のあとさき、何をしていたのか全く思い出せない。三十年に近い歲月がみんな消してしまつたのだらうか。

## 私の八月十五日

関美子

八月十五日と言えば、当地は旧曆のお盆。お盆を過ぎると、急に土用波が立ち始めるので、昭和二十年のその日は、地区の児童会の仲間十数人で、家から四キロ離れた遠浅の海へ最後の海水浴に出掛けていた。

お弁当を食べ寝をべていると、リーダーの一人が駆けて来て、何処で誰れに聞いたのか、「戦争が終つたんだと。日本が敗けたんだよと、俺信じられんけどな。ヨシコちゃん、着がえろ直ぐ帰るぞ」

と声を落して告げたので驚いて砂を払つた。「欲しがりません勝つては」で鍛え上げられた上級生達はさすがに動揺していた。

帰路、日本はどうなるのか等と言葉少なに話し合っていたような気がする。

今、終戦記念日と言う言葉を耳にする時、私の胸を去来するものは、あの浜辺の昼下り幼な心をかすめた不安と、松林に潮風をほしいままに受けて建つていた一基の忠魂碑である。

(順不同)



北川春巢選

大和郡山市 森 田 カズエ

一坪の庭へ雀の餌を撒き

台秤りジャガ芋秤かる娘の料理

文化財指定雨樋い朽ちている

俠気をだして迷惑背負わされ

首の骨鳴らす課長の廻り椅子

総入齒孫の不審な目に出合い

竹原市 三宅 不朽

野火莊敵鎌も瑞穂の国の彩

童貞という語がなつかしい青葉

むかしむかし煙突絵になり詩になり

着飾った女がやぼったい青葉

燕返し空気に壁のあるごとし

鳥取市 両川 洋々

ベチャンコの胸で想い出燃えつづけ

道理には叶うが妻の口が過ぎ

坪十万人は楽に家を建て

小心の浮気はカスリ傷で済み

財布ごとヌードに酔うていて落とし

東京都 山根 白星

ドイツ語がかすか麻酔がきき始め

言葉にもならぬ怒りの漁夫の鰓

おずおずと金の運用法を訊き

口輪はずされて月給日を吠える

獣医科でさえも髣髴する過保護

大阪市 小谷 葉子

糜杭のざくろ夕陽に熟れ急ぐ

秘めごとがあつて消したい明日の午後

八月の海は人恋う蒼さなり

ムード派の女となつて鼓とじる

果されぬ約束青春の陽が足らず

岩国市 村井 西合

七人の敵へ中二のモデルガン

はい上る足場へ力つかいきり

ぬか漬へ夫の箸のはずみよう

働いて得た俸せが空しすぎ

大阪市 新川貞祐

存在を主張し続ける胃に困り

春斗の上げ巾程の年金が来る

夕立に日傘をかばう慌てよう

長髪のヤングかゆくてたまらぬ踊りよう

原庄治改め

和歌山市 仲原己恭

Gパンのまるいお尻が女です

膝の子になめさせてみる美味しい酒

老人の欲を離れた顔の良さ

長生も芸と云わせる顔の艶

尼崎市 中谷利美

浮気する勇氣もなくしてストリップ

出世率下戸を上戸が上回り

ホームバー マダム酔わせて悦に入り

達筆の手紙へ返事書きしぶり

守口市 岸本豊平次

ポーナスの配分比重妻が決め

宗教に見込まれている不仕合せ

割烹着で手を拭きながら妻の出番

父の日に期待してたら腹が立ち

和歌山市 垂井千寿子

座っても立っても女ポーズする

普段着の女後列にひっそりと

病室を予約してから不養生

書留が来るまでおあずけするデート

三重県 川上富子

涙涸れて女無表情になる

浮気するスリルも夢の中のこと

赤ちゃんを奪い合っている平和

手を握ったくらいをそんな大げさな

今治市 大本バット

買占めで好配当の株を買い

躰養子やっとな家伝の味を継ぎ

年頃の太股も出し躰も出し

袖裏の紅絹が女の腕にする

大阪市 内藤ますえ

自然食などと味噌まで見直され

雑草のようにきっかけのがさな

信頼をしてもせんでも夫婦です

和歌山市 秋月宏方

故郷いいな草木の匂い陽の匂い

左官屋のおっさんだった自家用車

中山七里にて

緑の絵の具神さま使いすぎ

今治市 渡辺伊津志

ちゃんと名を呼べとわが子の反抗期

どうしても躰を見せたい水着買い

相槌を打たぬ夫をはがゆがり

米子市 石坂新雪

喰いつきの悪いハゼにも似た女

精神科くずれた顔にふりむかれ  
脳にまだ血清不足と云う笑い

島根県 堀 江 芳 子

ピンぼけの返事でまるい座にかえり  
夾やかな風ほめられて通り過ぎ  
花菖蒲おんな盛りを見る如し

大阪市 阪 上 十 止 庵

妻の目のとどくところにいる平和  
女の階級きめるカラット

無駄な抵抗硬貨を山と積んだとて  
島根県 谷 岡 芳 枝

嫁がせてまとめてガサツ年をとり  
便りこぬとばかりみんな母が受け  
娘の為に振らぬばならぬムチ重し

河内長野市 井 上 喜 醉

やけくそが男の価値をぐっと下げ  
団結を破って名前と顔が売れ  
途中下車真面目な友に見送られ

竹原市 岩 本 文 晴

春夏秋冬瀬戸はロマンの色で暮れ  
生きているあふれる汗をシャツでふく  
結婚三カ月星占いをまだ信じ

旧姓生信

竹原市 岩 本 笑 子

黙秘権私も涙が出そうです  
二人の前に一番星があり

二人三脚坂道なんかおそれない  
和歌山市 ぶきあげ 虎 城

眉毛剃りおんな殉教にはあらず  
あざむいた肌を鏡にうとまれる  
紙人形創る夜男の匂い消す

大阪市 松をか 右 式

一畑の石段のぼる蝶つれて  
婚前か婚後か大社ベアの群れ  
玉造少女は老いていい女将

大阪市 堀 口 欣 一

バスラッシュ女の膝に割り込んで  
評論家曰く可もなし不可もなし  
習性はおんな女を振り返り

神戸市 佐々木 静 泉

PCB瀬戸の鯛よお前もか  
鳥取市民税支払い通知一句  
税ならばこそ神戸まで追ってきた  
三代も同じバツジの職に生き

今治市 渡 辺 南 奉

子は宝 宝の熱へうろたえる  
金ためる粗食の日々に張があり  
その過去は許るそうバラが赤いから

新潟市 高 野 不 二

子の方がくわしい歌手が又歌う  
三分で合鍵出来て来る平和

苦勞した話が酒をうまくする

寝屋川市 福 富 隆 子

内職の話窓越しにする梅雨

寶石の色した葉飲み続け

夫婦歴どっちが豚に真珠やら

鳥取県 林 露 杖

娘がくれたネクタイ父の日派手に締め

鳥取砂丘二句

追えば逃げ砂丘を泳ぐ若い恋

兵として駆けし砂丘のここに立つ

八戸市 安 田 かつみ

奇形魚の住むとは見えぬ夏的大海

戦争を知らぬ軍歌の歌謡調

けん制球かわして肚をさぐり合い

今治市 伊 藤 一 郎

公害の因果忘れた虚仮の知恵

度忘れの数で余命を予測する

招待の旅行養生中も行き

米子市 増 田 竹 馬

掃除器のように陸橋客を吸う

どう見ても整形と見えぬブラウン管

少年の夢一とすじに雲の峰

青森県 波 ただお

蛙の鳴き声に万才したくなり

ユカタ着て金魚すくい夜楽し

ベルの音に馴らされ胃袋空いて来る

須賀川市 平 栗 金太郎

宿の名をズバリ当てられ土産買ひ

投函するハガキ終日持ち歩き

物価高二日の休み持て余し

守口市 野 呂 右 近

既にして苔むす一等兵の墓

黙々と読めど孤独とも見えぬ

爪の色変える女に明日があり

和歌山市 樫 村 ふみよ

重い腰上げた頃には散りはじめ

夜更けてのベルこわごわで取る受話器

方言も足も投げ出す里帰り

大阪市 竹 内 一 世

にが虫の原因着にしている平

音たてて希望が湧いてくるも春

連休の人出へ自制心を持ち

島根県 安 達 潮 音

子のこと孫のことほかには夢がない集い

命惜し仮名書きの孫の初便り

もの言わぬ漁民の怒り海にこる

羽曳野市 麻 野 幽 立

五月雨へ花の命を守る傘

冷戦は続きそう靴汚れてる

遠き人写してひるの月を見る

今治市 古野伶人

渡り鳥帰り損ねていたわれ

身長は聞いたがバスト迄聞けず

着飾った出船は胸のはずむもの

大阪市 児玉節子

課長会議登城するよな顔が行く

不安さも除々に消えゆく初着逢う

老若の歩調乱れぬ通り抜け

大阪市 吉野志津

物価高これでもかと云う五千均一

酒すきの父の娘さすが愛そうよし

金婚式ハネムーンのように旅に立つ

大阪市 広畑賛平

時鳥鳴いて祠の絵馬古し

時鳥読経の木魚しばし止む

振り袖のお色直しにわく拍手

東大阪市 落合思月

余生とは悲しい後のない土俵

世帯苦を忘れて里の灯にすわり

大洲市 堀内曉風

善根を積んで極楽信じ切り

枕元みんな視つめてご臨終

七尾市 松高秀峰

腹案もなく反対をするあわれ

口だけはまだ達者です夏便り

仙台市 川村映輝

物価高い物ほどよく売れる

五体爽快物価高を吹き飛ばし

新潟市 市川一峯

子供なく隣りは矢車廻っている

敬老会去年の顔が一つ消え

島根県 東原福子

雑布を持ったら女らしくなる

チャンスもう後姿となつて逃げ

大阪市 横地正彰

幾星霜旧軍イメージ取れぬ国

夜なきそば明治は遠くなりもせず

岸和田市 池田香珠夫

諸行無常老優舞台に穴をあけ

乗越してない居眠りをまた続け

青森県 荒田つる

ケンカする今がしあわせかも知れず

拒絶する手紙二行で書き終り

姫路市 大原葉香

徒食して煙草の吸がらだけ残り

初夏を着る女水玉模様なり

愛媛県 小山悠泉

骨組の俣で値上りほっとかれ

礼儀わかまえて若者見直され

宿毛市 山本窓花

泣きごととはよそうよ明日へ強くゆく  
錯付いて動かぬナイフ自我に似て

大阪府

小谷清女

ふっくらと気分で髪が束ねられ  
つまずいた五十の坂でひまが入り

鳥取県

大坪天涯

汗臭い男同士の情に酔い  
ライバルの再起嬉しい腕を組み

鳥取県

有田鹿の子

浪人と言う重い荷を子と背負い  
記念樹も子に負けていず花を持ち

岡山県

武元柳子

よろこびを心に菖蒲湯にはいる  
トレーラーに苗のせ夫のせ運転す

松山市

谷のぶお

夏みかんレットルがあり故郷あり  
高座からなめられて客うれしがり

名古屋市

大林曲ん手

馴れて来た金の卵に彩を塗り  
旅に出る妻の荷物を提げて見る

羽咋市

三宅ろ亭

言葉までぞんざいになり野人化し  
激励に病臥の顔は血が滲み

鳥取県

大塚豊生

中年のひがみ裸婦の絵素通りし

へそくりを足して泳がす鯉轆り

豊橋市

鎮浪翠月

美しい素顔に父母の血が流れ  
土地を買う金ためる間に老いてくる

寝屋川市

井上武松

弾丸の下潜った命ここにあり  
夫婦喧嘩子の作文のネタにされ

今治市

真山国彦

同権の喧嘩女が先に投げ  
市役所のノーカー県はそっぽ向き

今治市

今井松花

二階から上は何屋か新社屋  
麦秋の風が途切れて眠くなり

備前市

武内雅堂

青空へみなしご母を描きけり  
人妻のリズムに合わせ散歩道

貝塚市

行天千代

二転三転ねむれぬ夜 夜とたたかう  
通院のベテラン同士今日も逢い

熊本市

大塚、齋

うつむけばお尻のみえるスカートで  
湯気が立つように阿蘇は晴れてゆく

高槻市

山田スミ子

梅雨の雨思ひ出がある過去をもち  
ノートの余白私のメモが気を休め

岡山県 千原信恵  
嫁ぐ娘と川の字に寝て皆無口  
減反と過疎にも田植機音高く

寝屋川市 江口度  
雨雲が時間の迷子にする昼寝  
久しぶりの故郷で視線が肌をさす

竹原市 古江雅鳳  
耐えてゆくちからとなった恋であり  
頼りにはされて金には縁が無い

西条市 片上明水  
村役場田植すむまで延ばす会  
お隣りが建って風鈴位置を変え

氷見市 有磯涙月  
栄転へ泣く人もある顔馴染  
ハトポツポ下戸も唄うて座が乱れ

厚木市 高野芸太郎  
愚痴っぱく姑電化の中に住む  
浮き袋陽は公平に肌を焼く

弘前市 小山内貞男  
野良たのし無念無想の鍬光る  
猫よりもましに見られる田植時

泉佐野市 大工静子  
ライン河異国の風は頬をうつ  
アカシヤの散る町苦学の日本画家

大阪市 河野幸子

本日は怒っていない顔を読み  
時刻表早くも心旅にあり

大阪市 今西寿子  
もだえてもとどかぬ思慕で今日も明け  
好きですと答える準備出来てます

東京都 宮崎美津子  
捨て石に甘んじてくれた兄がいて  
善意プラス善意が生んだ喰いちがひ

西宮市 宮本茂児  
負うた子の重みに老後の期待かけ  
春眠を電車の中まで運んで来

大阪市 稲葉星斗  
広き門それでも母親はつき添いぬ  
一の橋同期の桜に香絶えず

大阪市 長谷川貞  
よく伸びた足が自慢でミニをはき  
ご先祖の霊までビルの中に住み

大阪市 鈴木生仏  
子を捨てるような男は妻も逃げ  
善光寺昔は牛も客を引き

大阪市 木村浊水  
田植笠どれが嫁やら赤樺  
病む友に一病長寿の見舞のべ

大阪市 松岡茶々坊  
幸せな身分身体を持て余し

甘えてる事がうれしい青春期

大阪府

花田繁子

もう僅か惜しい一日今日も暮れ

新ゴボー茎の薫りに初夏の味

島根県

岩田三和

日本を仕立てる妻のしつけ糸

鳥取県

福田陽山

ゆっくりと休める鉢果報すぎ

兵庫県

高橋近江

持てる気にさせてサツキの花盛り

大阪府

平井露芳

気休めを自分で云って未だ癒えず

倉敷市

津田耕水

麻痺の手で観世経よれてうれしき日

今治市

原田輝親

ロータリー花壇も花も交替し

大阪府

大國たかし

履歴書で実力迄は判かり兼ね

堺市

栗本藤持

タレントは結婚離婚売りに出し

羽曳野市

戸水慶子

結び目を解く心地にて春を待つ

新見市

吉田落猿

ちがい棚古備前鈍く光る部屋

岡山県

沼本美智子

美容体操でギックリ腰になり

豊中市

安藤寿美子

堂々と佳人薄命の裏を生き

大阪府

村島秀村

菖蒲園きれいに咲いて客を待つ

大阪府

須浦つね

三児の母未だに帯を持って来る

大阪府

浜西駒子

夕ぐれの帰路自動車たばになり

西条市

豊島フク

踊ってるのではない小児マヒ強し

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

橘高薫風

花道が切れてわたしの足音だ

水粉 千翁

華やかな人生を辿ったが、一時期を画して静かに自分を見つめる生活に入った。足音に万感をこめたこの句からは、その境涯に対する充足感までもが感じられる。

日曜は旗日をおんぶしなくなり

工藤 甲吉

現代社会の趨勢を詠っているなどといったむずかしい理屈は、この句には不必要である。軽妙そのものの句だ。一読にんまりさせられるこういう句は、それだけで価値がある

人生の幕七分降り八分降り

若柳 潮花

作者は日本舞踊のお師匠さんで、大劇場での出演の経験も豊富である。だから、これは舞台上で実感された幕の降りる感慨なのである。ここにわれわれ観客席からの幕への感情とは異なる深い哀愁がにじみ出る。

女哀し裏地に紅をまだ残し

本多 柳志

女心をすばりと云ってのけた。これは又、古来からの日本婦人の奥床しさでもある。

あんなこと言わなくて済む仕合わせさ

石倉 旅風

代議士が、なりふりかまわず「お願い致します」と連呼することを云ったのか。或いは派手な生活費の捻出のために大会社を恐喝する無頼の徒を指したものか。兎に角、庶民には手の届かぬ部類の人間を狙上にした句なのである。「仕合わせさ」の語感に、分をわきまえ諦め切った下積みのかそけき嘲笑がある。

テレビドラマいまわの際によく喋り

傍島 静馬

川柳はテレビ一つを見ていても作句出来ることを端的に示してくれている。それも作者の感受性が問題だが。

鉄橋に夕日俸せまだ遠い

谷垣 史好

新しい感覚を駆使したこういう句も、どんなに出て来て欲しい。錆色に塗られた鉄橋の向うに落ちる日、都会の一隅にこういう貧しい風景がある。手弁当を提げた少年工が歩いて橋を渡って行くようだ。

晴耕も雨読も夢の夢だった

福田 丁路

戦後百姓の真似事をしたのは帆をしのぐ為だった。定年が来たら、悠然として、と願っていたのは夢でしかなかった。いくばくの退職金を手にして老後の不安がつきまとう。

恍惚もお金は若干はつきりし

福井 野迷路

人間の金銭への執着を恍惚の人を素材にしてまとめた作者、十年のキャリア。

ひと針ひと針縫うて男を追いつめる

鈴木 村諷子

妻女に問いつめられている男の姿まで目に浮かぶ。理路整然として緻密なのは針仕事をしているせいなのである。うまい句だ。

歡喜天子の無い夫婦ヒソと立ち

村上 春巳

歡喜天は人に幸福平和を与える神だが、一般に性の神さまとされている。興味本位でさわめて見物する団体の傍で、子の無い夫婦一組だけは厳肅を保つのである。

掛軸の運筆頭で真似てみる

島居 百酒

頭で真似てみるが面白い。腕組みをしているか、手はポケットにあるのだろう。

末法のお寺らしくてよく栄え

川口 弘生

お四国さん参りをした時のこと、あるお寺で軸に寺名捺印を頼む団体参拝者をさばくのに、乾燥用にハンドラ（ハンド・ドライヤー）を使用していた。私はやんぬるかなと思

た。

他の佳句

黄砂舞う宇宙働哭する日なり

小砂白汀

棘の先円くしていた女です

時広一路

応接間誰をお通しする農家

村上旭童

或る日フト聖書を読めば意に反し

谷無閑

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

コツコツと溜めて其の先き不安がり

荒田つる

平語俗語で人生を語るのが川柳の大きな要素であり持味とするなればこの句のよさは自から定まる。老人の問題もこうあっさり触れられると反って深刻さを覚える。

離婚してからの不幸は口にせず

中谷利美

順逆何れも宿世の因縁なるようになって果ては終りで、敢て深追ひ禁物。愚者に任せてその後を口にせず、光風舞月とは行かぬまでも、明日へ生きる努力は立派なもの、同憂の人達へのよき清涼剤となろう。

刺しもせぬ蜂を疑う思しさ

堀江芳子

女人ならではの句疑うては悟り、悟っては疑う女ごころの思しさも愛すればこそ、ああ私しも蜂になりたい。

年輪のバランス庇う和服の美

榎みどり

よく言われて居ることを句に纏められた。行き届いた技法を喜ぶ。中年の体型の变化を着慣れた和服でカバーして一分の隙も見せぬ増さ。下五の結句の固さもそんなに感じさせぬのも句材の関係からか。

決断へどうにか食えるが水を差す

三宅不朽

怖れは過去の古い経験の殻にあって、若い当事者には何の枷にはならぬ。ここにも新旧の時代の断層を見るおもしろいがあるが、何時もながらこの作者の健在を喜ぶが。

お茶のんでお手を握っただけのこと

林露杖

親やぐるりが案ずる程、無鉄砲でも無ければ聞くでもない。良識と性格に制御されてやっとこの線まで進転して来た次第。御前はまだまだ遠い、そっとして見護ること。

儲からぬ事で老後が忙しい

伊藤一郎

町内会、老人会と健康に恵まれて老後ますます多忙、元より一文の儲けにもならぬ事、家族への気兼ねも一歩外へ出ると我が世の春の気楽な身分、善人の姿も麗しく見ゆ。

農業の希釈度驚を呼び戻し

三宅ろ亭

一時久しく声を聞かなかった雀も昨今、毎朝少しづつ聞かれるようになった。同種同族繁栄の自然の哲理はよくしたもので農業の取扱いようでこんなにも明白に判る。そんなことを句に纏めようと思つていとこの句に出会った。都会と地方の差こそあれ人間の心理の鏡はそんなに違わないと思つた。

シナリオになかった女にゆすぶられ

古江雅鳳

人の世の難しさはなかなか筋書通りにならない処にある。況して女のことになるとあの人がと思う人が迂余曲折の過去を持つもの、下五の結句の簡単さの中に事件の面白さが出ていて痛快さを覚える。

いやな奴と飲む破目先に酔いつぶれ

江口度

生活のかかっている交際、況して気の会ぬ人との宴席程不愉快なものはない。作者たらずとも先につぶれ度くなるのも道理。大胆にぶつ切りにされたような大まかな何もまた人世の一断面か。



句碑と西尾葉氏(左)と尼緑之助氏  
(カメラ岳人)

## 葎乃先生の祝辞

西尾葉

当日は埃り沈めの雨がパラパラときました。が間もなく晴れて、日本海の家は珍らしく、全くの静かで、一〇〇人余の入達の参列する中を、除幕の式は、いとも荘厳に、神主さんの祝詞の声と共に進められました。

お孫さんの由佳子ちゃんへの振り袖が一瞬ひらめいたと思うと、あのどっしりとした、句碑が私達の目の前に現われまして、アッと許し声をのみました。

葎乃先生のおよろこびの言葉を代読する順番の廻ってきた私は、すっかり緊張してしまつて、一字一語間違えないよう、又先生の用心持を、間近に聞いて下さる緑之助さんに、どうしてお伝えしようかと一生懸命で、いささか声もふるえていたようでございます。

### およろこび

今日の佳き日を諸手をあげて、緑之助さん万歳と叫びたい気持ちいっぱいでございます。私は今遠い昔に逆つて、簸川支部と云う、なつかしい名を思い出しております。そ

れは「川柳雑誌」が菊版の時代からの一番古い支部の名であるからでございます。又その支部長としての、あなたの御支援も今なお忘れぬ思い出となっております。あなたは今川柳「いずも」の御大として川柳の発展とその質的向上につくしていられますが、私がかねてから、あなたを尊敬していることは、あなたが御自分の生活を大切にしていること、でございます。人間として如何に正しく生き可きかという真剣な態度なのでございます。これと同時に大自然の構成にどうして融和すべきかという努力もあなたは持つていられます。この二つの魂があなたも二本のレールのように並行して今日まで続いて来ましたが、あなたの風格となつてしまつたのでございます。

あなたはパツと咲いてパツと散る桜や、牡丹のような、はなやかな存在ではございません。秋草の淋しさはあつても、地道なたのもしいお方であると私は信じているのでございます。おそらく他の方々もそう思つていられ

前月号に於て板尾岳人君が、尼緑之助氏句碑除幕の光景を素晴らしい筆致で書いた簡潔の名文の中で、大社町長、生々庵主幹に続いて、葎乃先生の祝辞によつて、尼緑之助氏の瞳に光るものを見たという一節の、葎乃先生の心からなる、メッセージを、ここに記録して、路郎先生歿きあとの葎乃先生の門下生を、いづくしまれるお心の中を皆様と共に拝察致したいと思ひます。

ることとごさいましよう。

この度、原独仙さん、その他の方々のお骨折りで、素晴らしい景勝の地に、句碑建立の運びとなりましたのも全く、あなたの人徳によるものと、私は思っております。きざまれた句碑の句、灯台の灯の消えざる如く地方色ゆたかな句の典型として、いつまでもいつまでも皆様と共に、謳歌し度いと思っております。ほんとうに、おめでとうございました。遠く生駒の地より心からのおよろこびを申し上げます。

昭和四十八年五月十三日

麻生 霞 乃

緑之助さん、おめでとうございました。  
出雲路の神話の句碑に風光る 葉

## 橘高薫風の第三句集成る

### 肉 眼

定価 千円  
送料本社負担

題字・藤沢桓夫先生 序文・中島生々庵主幹

―路郎先生逝去後の四百五十句を収録したものである。路郎先生の秘蔵つ子薫風さんが、路郎選を経ず自選をもって世に問う野心作がズラリ四百五十句、けだし圧巻である。社内と外を問わず円熟味を増した人気作家、薫風さんのために駄文を草し、この壮挙を心から祝福したい。(不二田一三夫)

発行所 〒5442 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川 柳 塔 社

(葉代誌)

緑之助さんを心から知っておられる、この名文に、緑之助さんはもとより、参列の方々には、深く深く感動されたこととごさいました。そして間もなく暗れた五月の空は、白亜の灯台より吹く薫風に、海猫の声をききながら、燦然と立つ句碑をバックに主賓を囲んで写真の人となつて、何時までも何時迄も去り難い、日御碕の情景でございました。

〔広告〕

## 「昭和川柳誌集成」

に就いてお願い

永年調べて居りますが、いまだ未知未見の川柳誌も多いことと思われまふ。創刊号若しくは改題号お貸しこと下さるか、その概要をお知らせください。お願い致します。

連絡先

〒 187 東京都小平市たかの台一四一四  
奥 津 啓 一 朗

岡 田 甫 著

## 「川柳京都めぐり」(絵入)

諸家絶賛、好評噴々たる著者の「川柳東海道」に収められなかつた「京都めぐり」を江湖の熱望にこたえて刊行。ガイド・ブックにも逸せられている史跡・歴史譚は興味津々、読者を魅了するに相違ない。

A5判九四頁・図案十八葉入・和紙和装・本文二色刷極美本。一七〇〇円(千共)特製本一〇部限定・署名入、二五〇〇円(千共)―ご注文先〒112 東京都文京区大塚四一三三―光(振替口座・東京八〇七一―一番)有 光 書 房

# 近 詠

須坂市 高峰 柳 児

生きのびる執着酒断ってしなび

未婚のあせり遠回しの世辞に馴れ

首を傾むける主治医の眼へすがり

大洲市 米 沢 暁 明

思い切り子はたっぷりとマヨネーズ

一命を捨う東の空白む

結局は親が出て来てまともあげ

今治市 月 原 宵 明

墨摩って明治は今も筆を噛む

さみだれの河岸の柳に古代調

紫陽花の色鮮やかに雨あがる

上田市 金子 呑 風

五つ珠はじき電算機を疎み  
家主とてどうにもならぬ日照権  
そのうちの泊夜行とも書かず

岐阜市 市川 鱗 魚

恍惚の哀れ落ち鮎笑えない

古削がかくせず夜のサングラス

無責任だからスラスラボールペン

東京都 池 口 呑 歩

「花咲爺」花咲く訳を子に訊かれ

「一寸法師」無視 怪獣に子は夢中

子は鬼の怖さを知らず「桃太郎」

今治市 長 野 文 庫

せまり来る暮色ヘライト生きて来る

酒を釣ぐ仕事夕方から出かけ

B29の頃には澄んだ空だった

# 謹 告

西尾 葉

こだわらない心

大 路 美 幸

昭和四十八年六月二十二日、母の告別式に

は、川柳塔社及び支部句会様より櫛を頂き、

主幹はじめ多数の方々の御会葬並に御丁寧な

る御弔辞御香資を拝受致し、又地方の柳人様

より御懇篤なる御弔電を賜り、御芳情の程誠に有難く茲に謹んで厚く御礼申し上げます。何分取込中とて失礼致しました事、多々あつたと存じますが何卒御寛恕の程お願い申し上げます。母タミエは本年数えて八十九歳で、病名は心筋梗塞にて、あっといふまの大往生でございました。生前の御交誼を厚く御礼申し上げます。

昭和四十八年六月二十六日

柳人各位様

仏教に、阿耨多羅（あのかたら）三藐（みやく）三菩提（ぼだい）という言葉がある。之をこだわらない心と解す。此のこだわらな

い心の境地に達したとき、人間は心眼を開く。絵も彫刻も文学もすべてこの心眼により発見される。

川柳に伝統あり、革新あり。そしてその中に、時事あり、彼景あり、心象あり、感覚あり……。或る者は、他の者を川柳でないという。しかし川柳は、そんなに巾の狭いものであってはならない。十七音字で表現出来るあ

### 第16回（誌齡二百号記念）

## 近県川柳大会

（竹原市）

日時 9月2日（日）午前八時から（出句締切12時）

会場 竹原福祉会館

兼題 帽子・気性・橋・うっかり・鎖・いじわる・長男・新聞・朱（各2句）

特別課題（当日1題）

会費 五百円（発表誌、参加賞、軽食）

表彰 県知事杯ほか20位まで贈賞

投句締切 8月末日まで（用紙は巾4cm長19cm。裏面に雅号。二百円（切手代用可））

〒725 竹原市竹原町田中 山内静水あて

主催 たけはら川柳会

後援 市教委、商工会議所、毎日新聞竹原通信部

らゆる言葉を、それが何であれ川柳の分野と考える。川柳を俳句と比較して、三太郎は、「とんかつは豚であるが、豚はとんかつにあらず。」との名言を残した。俳句には制約が多すぎる。その制約を破れば、川柳となる。日本の短詩文芸が短歌より始まって、川柳によって大衆のものとなった。その間、二千年もの永い間、人間は考え、詠つて来た。そ

### ▼8月の句会

▼堺・若芽合同川柳会―十三日午後六時。題「流れる」「悪人」「運河」「水」―会場―八木摩天郎宅。

▼南海川柳会―十六日午後六時。題「恍惚」「独身寮」「放課後」―会場―南海電鉄本社食堂内。

▼姉妹提携第二回・篠山句会・菜の花句会・デカンショ川柳大会。

日時―八月十八日（土）午後大阪駅出発。場所―篠山国民宿舎。大会後デカンショ祭参加。一泊、翌十九日篠山及び籠坊温泉観光。

兼題―「デカンショ」「散歩」「踊り」「粗忽」「気配」（詳細は〒581八尾市八尾木八―七西尾榮あて）

▼南大阪川柳会―二十日（月）午後六時。題「黒」「美貌」「なごむ」「プライバシー」―会場―松崎町二丁目以和貴荘

▼川柳東大阪川柳会―二十五日（土）午後六時。題―「水銀」「手前みそ」

して、漸やく川柳の域へ到達したのである。その尊い努力の結晶を現代人は、安直に考えではならない。今や川柳は、日本の短詩文芸、否、世界の短詩文芸の域にまで発展しつつある。川柳人は心してそれを自覚し、こだわらない心で、作句し、鑑賞し、そして行動しなければならぬ。

「ひまわり」「ペランダ」―席題共選一題。

会場―東大阪市中央公民館第二集会室二階

▼第25回西日本川柳大会―投句締切8月末日  
▼かがみ句会―九月二日夜―題「彼岸」「無効」「食欲」―十月二日夜―題「入目」「深入り」「冗談」―雑吟は毎月募集。会場は池田古心宅。

# 新芯気鋭

●いつまでも細く書ける硬質サイレンペン

黒・赤・青  
1本50円



ライオン  
ジェットペン

福井商事株式会社



灯籠

馬場魚山選

玄関のバラソルそつと又出掛け  
 プレゼントしたバラソルが待てども  
 思ひ出を秘めたバラソル捨て切き  
 バラソルをささぬ喪服の列が行く  
 バラソルで隠し切れない傷手でず  
 バラソルをかざし逢わせてなむひと  
 バラソルをさくるりくるりとすねても  
 天 里 風  
 浜木綿は日暮れバラソル動かない  
 葵 水  
 軸 水  
 バラソルの妻と墓参へ蟬しぐれ  
 木魚  
 本蔭棒  
 古 心  
 春日  
 古 方  
 思 月  
 素身郎  
 綾 女  
 十止庵  
 曉 童  
 代仕男  
 里 風  
 葵 水  
 水 風

灯籠を流して元の暗い闇  
 泣かされた子が灯籠へ一人立ち  
 お百度は灯籠までの位置ときめ  
 灯籠の電球精霊戸惑わさせ  
 幸運な石は灯籠にされて建ち  
 暗転の舞台灯籠の灯がゆれる  
 献灯で故郷へ錦飾つて置き  
 灯籠の向きがどうのといひ生活  
 土地ブーム石灯籠を賣う農夫  
 灯籠と四つ谷と皿で夏涼し  
 灯籠を目指し来るよな恋がほし  
 灯籠もあつた本家の屋敷跡  
 灯籠を流したあとのところ天  
 灯籠を中に踊りの更けていき  
 灯籠も倒れたままの元旧家  
 名園の歴史を語る欠け灯籠  
 灯籠を見る目は持たず庭をほめ  
 灯籠の寄進は全盛だった頃  
 流灯へ 奇人を偲ぶ心添え  
 灯籠と月で舞台が出来上り  
 灯籠を立ててもうけたとは言わず  
 灯籠の明りへ鯉がはね返る  
 流し灯籠ゆらりゆらり逆らわず  
 海人のやしらか灯籠沖へ向き  
 灯籠の池に落ちてるから静か  
 灯籠へ驕りを見せる成り上り  
 相寄りて 灯籠流す原爆忌  
 ご先祖の 献燈残し村を去る  
 灯籠も朱塗り春日に灯が入る  
 新築に灯籠の位置邪魔がられ  
 眺 風  
 耕 水  
 明 春  
 右 近  
 洋 々  
 カスエ  
 与根一  
 春 日  
 英 詩  
 本 蔭  
 金 太  
 金 太  
 木 魚  
 葵 水  
 隆 子  
 曉 明  
 重 人  
 利 美  
 弘 生  
 克 枝  
 不 二  
 秋 女  
 静 泉  
 章 雅  
 千 翁  
 思 月  
 無 人  
 祥 月  
 伊 津 志

苔つけたまま灯籠を売る落ち目  
 灯籠の下に捕うて西瓜喰う  
 奉納の字が欠けている大灯笼  
 灯籠を小脇に抱え道具方  
 灯籠の道を廻れば朱の社殿  
 ソケットが付く灯籠で味気ない  
 灯籠が釘付けされている舞台  
 佳 白 水  
 灯籠送りいつかわたしも同じ道  
 灯籠の頭で鳥の一石のみ  
 五子別居夫婦に残る石灯籠  
 灯籠を数えて着いた二月堂  
 仏法僧啼いて灯籠うす明り  
 人 木 魚  
 灯籠に灯を入れ客を待つ離れ  
 地 代 仕 男  
 灯籠で手堅く稼ぐのみを持ち  
 天 代 仕 男  
 灯籠の不始末と見た消防署  
 悠 泉

暑中お見舞申上げます

短期速成  
 費用低廉  
 内容充実  
 三大モットー  
 入会随時受付

大阪市南区大宝寺中之町一

誓得寺内

関西奇術教室

校長 村田 瓢太

# 初歩教室

題「流」

本田恵二朗

当教室の行き方を再確認して頂くために、いささか述べてさせて頂く。私は添削ということは作家の意を曲げるおそれがあるので、添削という名のもとに、句主に句の叙法変更を強いることはやらぬことにしている。従って毎月発表の(一)内の句は、添削したのではなくて、その句の意を私の訛りで言うてみたまでのことであり、又その句の意を全くちがったものになることさえある。それはその句材にヒントを得て私なりの句を作ってみたまでのことである。それらのことは、作句への参考になればと願う私の心でもある。(一)内の句と比較してみることによって、自分の叙法の方が優れていると思われたならばそれでよいのである。自分の叙法よりも(一)の方がよいと思つた場合は、自分なりに反省したり練習り直して佳句に仕上げられるなら一つの進歩となるであろうし、自分の句と人の句とを比較してみることも勉強の手段となると私は思っている。上達の早いおそいは個人差

があるのがあたり前のことで、それを問題にするのではない。要は根気だと私は思っている。根気よく作句し続けるならば、句材も句姿も整ってくるものだと思つて歩き続けて欲しい。

急流が清流でない川となり  
△ (日本列島清流一つ消え二つ消え)

放心の視野驚ろかす流れ星  
(放心の目を突き刺した流れ星)

正直に流れて行けば突き当り  
(真すぐに流れ棒杭につき当り)

意気込みも何所やら大勢に流れさる  
(時流には勝てず意気込み霧となる)

木曾の流れにしぶきを浴びる瀬が五つ  
(五つの瀬木曾の流れにあるスリル)

ジパンが流刑の島に嬉々と飛ぶ  
(一流だねとママの料理に舌鼓)

水銀を水に流して門をしめ  
(頬かむりして水銀をたれ流し)

本流へ逆う竿を握る  
(本流へ逆う竿に力込め)

支流なりの椅子で気楽なり  
(支流という椅子で気楽にあけくれる)

自動車の流れを止める赤信号  
(赤信号カリーの流れをせき止める)

涙まで流したあれが嘘かいな  
(流行を着てもお里が出る女)

流行を着てもお里が出る女  
(流行を着てもお里はかくされず)

世の流れとは言え男性化粧品

球磨蘇

露杖

伊津志

呑少利

貞祐

同

誓二

無人

三十四

齋

慶彦

同

利美

お流れを頂載させて悦に入り  
(お流れを頂載させてる成金め)

流行に背中を向けて小銭貯め  
(流行はどこ吹く風と貯め続け)

日日夜転今日の将は明日の兵  
(流転劇きのうの将が今日は兵)

流言を信じて行動した不覚  
(流言を信じて野次馬になりさがり)

激流になればフアイトを燃やす魚  
(激流に來て若鮎が燃える)

あじさいの色又變り日も流れ  
(日の流れに乗ってあじさい色を変え)

ご時勢の流れに溺れそうな日も  
(めまぐるしい時の流れに溺れそう)

音たてて諸行は無常という流れ  
(音たてて諸行は無常に流れ去る)

逆うて流されては流れている  
(逆うて流されている流れている)

保津峡の流れ上手に舟をのせ  
(先月で流れましたと横をむき)

(先月で流れましたとそっぽ向く)  
新仏かえりは川に流される

鮎解禁流れに集う大公望  
(鮎解禁糸流しあい流しあい)

ステンレスの流し台あり文化村  
(文化生活の流し台あり文化村)

笹舟を作つて手始めといふ今も  
(笹舟を作つた頃のお下げ髪)

雨降は下流の者は大あわて  
(雨台風下流の街をあわてさせ)

古稀過ぎて世相の流れ恥を知り

同  
本蔭棒

度

翁童

右近

同

同

頼次

同

同

生仏

同

濁水

つね

静子

同

陽山



大 萬 川 柳

「深入り」

入選発表

選者 川村好郎

投句総数 七百五句  
入選 六十七句

堺 天 笑

後悔どころか深入りひらき直る

深入りをして噂の中にいる

深入りが無邪気が娘貝にする

病みつきのは底値で買うてから

深入りの悔なく雅号の友と酔い

深入りのもう算盤を捨てている

深入りを悔いる逢わねば胸いたみ

深入りをした裏判が泣いている

深入りを自業自得と悔む酒

真剣に惚れて深入りなせ悪い

小銭しかくれず深入りすなと云う

道ならぬ恋うつくしく死なす筆

悟り切るまでと深入りほつとかれ

身に覚えあり深入りへする意見

深入りをしてワナだったと気付き

金網を張られ深入りしたくなり

平凡の味が深入りしてわかり

忠告は深入りしてから身にしみて

兄さんでいてねと深入りさせぬ肚

深入りの邪恋夢におどかされ

若い時はと深入りウマが合い

深入りをして自問自答する

吳 英 詩

深入りを悔いてはおらぬ負け惜み

深入りを悔いても弱い女です

深入りをしてから女魔性めき

惚れたのが弱味とことん貢がされ

執念を褒め深入りをたしなめる

深入りを忠告に来て惚惚聞き

職捨てる結果深入りまだ知らず

深入りを出雲の神になすりつけ

深入りの反省底をついてから

深入りの夫へ嫉妬空廻り

深入りをしすぎて出口見失い

諫言を背に深入りふてくされ

深入りの罪で十字架背負う日々

深入りのもう成り行きに任せきり

ぼんぼんのまだ深入りに気がつき

深入りを悔いるネオンの灯が眩い

深入りの息子血筋だなと思ひ

同情的の深入り恋となり逃避行

深入りの鼓動となつてはる逢瀬

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

深入りをするなさせとバーのママ

堺 真沙子

深入りを帳簿の穴が知つており

姿見の私に深入りとがめられ

深入りの足を洗つた青い空

深入りはするなするなと散る馬券

深入りをすすの注意が煽りたて

深入りはすすまい前者の轍を見て

弁解をしたので深入り感づかれ

深入りをしている同士の昼の顔

情に棹さして深みへはまり込み

深入りの振り廻されて悟りかけ

深入りがまだくすぶっている因縁

深入りが利子へ息つくくまもなく

外泊つづく夫を強い母で待ち

深入りのスリルに酔うている動悸

深入りに酔うて気がかぬおとし穴

親切の深入りあらぬ噂立ち

深入りの契機となつた片えくぼ

深入りの邪心なかつたとはいえず

佳句

大阪 あいき

鳥取 一机

大阪 あいき

鳥取 一机

大阪 あいき

鳥取 一机

大阪 あいき

鳥取 一机

深入りもホケットマネーはくいと止る

神戸 どんたく

深入りへ近松ならば死なすところ

人ノ句

八尾 美 幸

深入りの沈まぬ長さに母の綱

地ノ句

堺 一 二三

深入りを諫めるかげにある嫉妬

天ノ句

笠岡 桃 里

深入りはすまいと帰る立話

選者吟

道は無限と深入りして悟り

寸評

男女関係の深入りを筆頭として

ギャンブル、株買いの深入りが大

部分を占め、かんばしくない深入りが多かったが、その中で天の句は類句が全く無く、とかく井戸端会議が思わず人の噂に深入りして喋り合い、あとでわざわざ詠んてことが多し。そこをうまく詠んで女性には殊にうなずかせる句であると思うが如何でしょうか。

昭和四十八年度

ベストテン(六月現在)

一	花 梢	一三、五	東田林
二	弥 生	一三、〇	東大阪
三	一 二三	一一、五	堺
四	史 好	一一、〇	松原
五	醉 夢	一一、〇	香川
六	克 枝	一〇、〇	倉敷
七	弥 栄	一〇、〇	富田林
八	吸 江	一〇、〇	藤井寺
九	真 沙子	九、五	堺
一〇	文 秋	九、五	大阪
一一	翁 童	八、五	倉敷
一二	牧 人	八、五	神戸
一三	梁 水	八、五	倉敷
一四	重 人	八、〇	松原
一五	白 水	七、五	倉敷
一六	好 一	七、五	島根
一七	扇 水	七、五	大阪
一八	本 棒	七、〇	奈良
一九	里 風	七、〇	倉敷
二〇	静 馬	七、〇	宝塚
二一	清 人	七、〇	大阪
二二	智 司	七、〇	大阪
二三	桃 里	七、〇	笠岡
二四	代 仕男	六、五	平田
二五	以下略		

投句先 533

堺市堀上緑町一の三の七 藤井一二三方 大萬川柳係

昭和四十八年度第九回 「かけ持ち」五句以内 第十回 締切 八月二十日 「距離」五句以内 締切 九月二十日

み

んなの暮しが明るくなる  
セキスイのプラスチック



積水化学  
本社 大阪市北区宇治町1

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

▼本年度の路郎忌は七月七日阿倍野区の以和貴荘で開かれたが盛会だった。田中好啓(倉敷市) 藤村淳子(アメリカ) 高橋鬼塚、三宅不朽(広島県) 尼緑之助、原独仙、坂垣草兵、藤井明朗、岡崎祥月夫妻、舟木与根一、吉岡通児、小林孤呂二、柳葉鶴丸、恒松可紅夫妻(鳥根県) 三井酔夢(香川県) 大矢十郎(新宮市) 川上大輪(三重県) 順不動(諸氏のご出席で会を盛り上げていただいた。

▼手毬(広島)の近詠欄はそれぞれの作家の一連の作品から、必ず一句を選び出して選者評が附せられていて、読む者にとって一人々々の作家がよく理解できる▼能因は水沢敏寛氏による川柳英訳を発表しているが

「笑われるたびに山出しあか抜けし」田舎者の身だしなみを洗練する」となり、日本語はワカリアウ言語で、英語はハナシアウ言語、この差訳をどううめるかが問題と。―「川雑」時代から故阿部佐保蘭氏が英訳川柳に生涯をささげられた。

▼柳都二十五周年記念川柳大会十月二十八日十時十七時。新潟市駅前労働福祉センター駅のすぐ右側。河野春三、後藤閑人、佐藤正敏、福水清造、大野風柳、白石朝太郎各選者、未発表句二句宛。はがき大用紙二百円(切手可) 同封出席者も九月三十日まで956新津局区内本町一柳都川柳社

黒髪人種であり、たかが髪を染めた(革新や詩性を指す)位で、次元の違う高度な人種に変身できた、と錯覚しているその愚さ」と水府のことは借りて、現時の番傘を論評。▼平安六月号で川柳界一本化の問題をとり上げ三条東洋樹、柿沼考人、大森風来子、佐藤正敏、斎藤大雄の諸家がそれぞれ方法論を述べ要は実行の段階と意見は一致しているが、一体その鈴を誰がつけに行くのか。▼四八年度国鉄川柳句集が全国鉄川柳人連盟から発行。風来子氏と閑人氏の序文がある。二三七国鉄マンの競作。発行所仙台市柳生字北原二八の五青木短波方。定価三五〇円(会員は三〇〇円)▼富士野鞍馬氏(東京都)は六月二十日港区医師会で

古川柳講話をされ、お医者さんの研究熱心に感心、生々庵主幹のご活躍に敬服していますと。▼米沢曉明氏(大洲市)が六月二十二日来社されたが、栞氏母堂の葬儀などで、どなたもお会いできず失礼しました。▼打吹川柳会の新役員、会長奥谷弘朗、副会長渡辺晋句、今村夕路の諸氏と決まる。▼世間話をしながら川柳をつくる川柳句会社交クラブが松江市に誕生。同時に青砥可明文庫がつけられ、資料千七百点を展示。毎月第二日曜日午前十時より母衣町城東公民館で開催。▼番傘で製作した映画「川柳史探訪」がNHK「スタジオ102」にとりあげられ、その反響に対して岸本吟一氏は、それは「川柳とはオカシイもの」と考えていたにも拘らず「そうでなかった」という点に要約でき、明治以降の川柳活動が狂句の打破という主目標にむけられてきたにも拘らず

▼一九七三年度周魚賞(きやり)―軽い日も重い日もある朝の靴(金子尚義)―叱られた言葉は叱る頃に生き(浅田扇塚坊)―一億の中から選った鶴と亀(山路星文河)▼北上年間優秀作品―物のない頃の癖から抜けぬ母(松原とおし)―次点―肩車(日本一の父であり(田中士郎)―美しいもの美しく見るゆとり(斎藤白洋)

# 花 公 栄 社

富田林市富田林24-4  
TEL 07212 ③ 2064



### ▽ 同人の動向 △

それは遺憾なことに今日でも変わっていないことを示している。

## 新同人紹介

小林 入道

榮・葵水・太茂津・推薦

▼西尾榮副主幹の母堂タミエさん(八九歳)は六月二十日心筋梗塞で急逝されたことは前月号で急告したが、生々庵主幹以下二十二日の告別式には柳界、業界の方々が多数参列した。

▼若本多久志副理長は社長業から第一線を引退されたものの多忙さは変わらず、韓国旅行、大型モーターボート操縦免許受検講習(船長資格をとられた由)老人大学受講など若者ハダシの勉強ぶりである。六月二十五日号の「けいさつ」の友には好郎氏や静馬氏ほかの警官を詠んだ作品をばさんで「川柳漫筆」を執筆された。

た。

▼橋高薫風編集長は第三句集「肉眼」を発刊。(詳細はP41に)十月句会をその刊行記念句会とする予定

▼板尾岳人氏や河内天笑氏らが島根柳人諸氏のガイド役を引くうけ大活躍。路郎忌句会終了後は社の幹部諸氏もその歓待役をつとめ、阿倍野界わいの店が小さく三方所に分かれるという賑やかさだった。

▼八木摩太郎氏(堺市)は六月十三日、NHKから「古い堺のことや川柳のこと」について来訪をうけ、中村李坡や路郎、水府の堺関係に応答。また路郎師の堺病院時代を同病院長からたずねられ、五十年の沿革史編纂に協力された。

▼河村日満氏(鳥取市)はソ連行き白羽の矢がたてられたのに今回は断わったため、周囲の人たちが惜んでおられる。

▼八木千代さん(米子市)ご入院中の母堂の看病で川柳を作る時間がないとのこと、母堂のご全快を祈ります。

▼三井醉夢さん(香川県)から一海の幸にめぐまれていたのに汚染騒ぎでサヌキの国もごたごたしています。

▼山田季賛氏(高槻市)はかねてから入院加療中とのこと、六月二十九日に退院され、目下自宅療養中。

▼水谷竹荘氏(大阪市)はまだ大阪通信病院北三階に入院中(小松園氏が見舞われた)だが鳥ヶ辻川柳会夏の句会を若林草右会長や森下愛論氏と相談中とのこと。

▼大坂形水氏に連れられて六月十七日薫風、岳人、新之助氏らが高鷲垂鈍氏を訪問、詩人としての路郎先生のエピソードを集録。

▼久米奈良子さん(東大阪市)は兵庫県立近代美術館に開かれた一策書芸院会員展で秀作賞を得られた。

▼加藤貞山氏(大阪市)は故郷の鳥取でガン張っております。

▼松下たつみ氏(浜田市)は鳥取市から浜田客貨車区勤務となり鳥根県浜田市浅

井町国鉄宿舎十六一八へ

▼不二田一三夫氏は六月二十七日の朝日テレビ「えぶろん」(漫才作家として)関西大教授宮本又次氏と共に語を中心に「一に才覚二に根生」だった。その翌日二十八日に松江在住の三女博子さんが「圭子ちゃん」を分婉。

▼旅信一水客、紫香、潮花氏(柳谷観音)一保氏(秋田)翁童氏(伊豆)摩太郎、青香、茂美、千万子諸氏(北海道) 拝受。

疲労回復・肩こり・神経痛に

**アリナミンA**

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠

☆食後すぐのものが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



08

# 本社七月旬会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

今年之路郎忌はおかげで盛会だった。そのご出席の顔ぶれもアメリカの藤村涼子さんをはじめ島根、広島、岡山、香川ほか大挙駆けつけてくださった。(雅号は柳界展望に)

生々庵主幹はまず挨拶をのべられ、路郎先生の偉大さ、そのご遺徳による川柳塔のあり方などを真剣なまなざしで会場へ対された。話術の天才吉田圭井堂氏は、夏の夜にふさわしいスリル横溢の「私が見た幽霊」を話された。

友人の結核患者の死と、その老母の戦慄の実話だが、真夜中に出る猫の動作まで細やかに描写され、会場が冷んやりする一瞬もあって、その姉妹篇はまたの日と、プロ級のお話だった。

月間賞杯は久しぶりに傍島静馬氏が獲得された。(小西無鬼氏、奥谷弘朗氏電文感謝)

——河井庸佑整理

出席—浩輔・たかし・与根一・太茂津・新之助・与呂志・明朗・文秋・生々庵・古方・榊・一三夫・静馬・柳宏子・柳志・圭井堂・鶴丸・通児・独仙・滋雀・草丘・涼子・喜風

・緑水・薰風・孤呂二・多久志・大輪・敏・十郎・一舟・小松園・秀信・肖二・綾女・百酒・三十四・香珠夫・素郎・緑之助・不朽・好一・誓二・弘生・好啓・鬼焔・悦郎・千万子・茂男・美幸・叮紅・素子・摩天郎・維久子・以兆・重人・儀一・亜鈍・亜成・葵水・千寿子・清人・祥月・雪美・花梢・トク子・一二三・トメ子・酔夢・瓢太・葛城・俊夫・喜美子・六童子・鶴声・あいき・智子・君子・静香・好郎・牧人・凡九郎・形水・克己・幸太郎・醉升・雀踊子・静波・吸江・庸佑・金三・酔々・良子・つき子・鬼遊・恒明・メ女・弥生・葉子

## 席題「力仕事」

原 独仙選

刺青が力仕事の過去をもち 亜鈍  
力仕事ホーレン草を食ってます 幸太郎  
極楽の風の中なる「ヨイトマケ」 古方  
パパ失格力仕事に背をむける 生々庵  
力仕事やれ肩たけ腰を揉め 庸佑  
力仕事出来る夫を信じきり 多久志  
よいと巻け綱引く腕の力瘤 葛城  
栄養百多力仕事がなぜ出来ぬ 喜美子  
これしきの力仕事に豆が出来 花梢  
頭脳化は力仕事を楽にする たかし  
自己診断力仕事は向きません 六童子  
学歴の要らぬ仕事で力こぶ 草丘  
日曜は力仕事が待つわが家 庸佑  
力仕事ならありますと安定所 柳志  
力仕事見ている方が汗をかき 以兆  
力仕事女盛りを束ね髪 通児

力仕事耐えねばならぬ父である 不  
力の要る仕事ならあります安定所 六童子  
女系家族力仕事はみんな僕 敏  
力仕事は機械に任せてレジャー呆け 君子  
コンピュータ力仕事は人にさせ 酔々  
アルバイト力仕事の父を識る 緑水  
力仕事学歴などにふれさせず 恒明  
重い物持つなと六月の嫁底い 秀二  
力仕事する人ストを主張せぬ 馨信  
今日からは力仕事も辞せぬ寡婦 千寿子  
青年の腕に力瘤がない 君子  
力仕事してまず雨の懐手 通児  
女護が島やもん力仕事かて女 古方  
力仕事過疎に育って苦にならず 鬼焔  
Gパンは力仕事の腰でなし 重人  
週に賭けた力仕事で光る汗 緑之助  
力仕事ヘスタミナ料理の本を買い 千万子  
力仕事励ます内助の束ね髪 悦郎  
文明の利器力仕事を喰っている 君子  
力仕事女を捨てて寡婦の肌 独仙

## 席題「別荘」

藤井 明朗選

別荘が集まり土地の名を知られ 葵水  
別荘をのぞくと犬にほえられる 雀踊子  
別荘も人手に渡る三代目 葛城  
別荘地草がどんどん利息積む 岳人  
別荘のように実家に避暑にゆく 君子  
夏休み貸し別荘へ子供連れ 綾女  
避暑避寒だけ別荘の窓灯り 通児  
別荘でローンの払いはじいてる 天笑

別荘をマンションに変えた老後哉 克己  
 開発が伸びて別荘メめ出され 与根一  
 別荘で悴うすき女住む 雀踊子  
 別荘のつもりで泊るパンガロー 肖二郎  
 別荘も人手不足で放つとかれ 幸太郎  
 別荘地お化け屋敷にならへんか 天笑  
 別荘の夏をはみ出して若さ 滋雀  
 静養どころか別荘へ二号おき 多久志  
 別荘地雑草の里年を越し 良子  
 別荘地買えとんでもない過疎地 醉升  
 その昔別荘だった家に住み 千寿子  
 おはけ屋敷のような別荘売りに出 以兆  
 庶民にも身近になつた別荘地 トク子  
 別荘は夢のまた夢 団地族 亜純  
 貸別荘利殖の口教えられ 恒明  
 別荘の朝を手形の夢で覚め 清人  
 別荘へ犬も来ている夏の避暑 好一  
 今すぐに別荘持てるどコマージュ 庸佑  
 過疎の村いつか別荘地に変わり 柳宏子  
 別荘の話チラホラ同窓会 トク子  
 夏痩せをみやげに別荘から帰り 千寿子  
 その実は地価の動きを待つ別荘 凡九郎  
 たまに来る別荘の軸カビ臭く 生々庵  
 けつたいな人が出入りをする別荘 緑之助  
 別荘の主人の顔は知られてず 弘生  
 太陽が落ちて別荘派手に更け 浩輔  
 利殖する為の別荘もっている 花梢  
 週末の別荘肩書きぬいで来る 明朗

席題「空涙」

岡崎 祥月選

心では舌を出して空涙 文秋

やっばり女最後に流す空涙 肖二  
 空涙女四十は演技する 小松園  
 倅を逃がしたくない空涙 孤呂二  
 夢を追う女が流す空涙 悦郎  
 親馬鹿に車買わした空涙 あいき  
 女五十見事に演技空涙 緑之助  
 空涙うっかり男ひっかかり つき子  
 女なら誰ももつてる空涙 柳志  
 空涙女は強い武器とする 牧人  
 空涙どこまで嘘を通す気か 幸太郎  
 補償金分捕るまでの空涙 香珠夫  
 その泪ウソと見抜いたコンバクト 六童子  
 お悔みの席迫真の空涙 緑之助  
 空涙流すも女の武器だった 敏  
 手切金涙の嘘に押し切られ 柳志  
 空涙そろそろ世渡りの手を覚え 生々庵  
 空涙ではなかつた寛美の芸の良さ 茂男  
 空涙も出さぬ乾いた人間さ 草丘  
 空涙まんまと孫にしてやられ 儀一  
 空涙女は愛を賭けている 花梢  
 女には奥の手があり空涙 柳志  
 本心が笑い出しそな空涙 花梢  
 空涙形見をねだるテクニク 柳志  
 いつわりの涙と知らず慰める 太茂津  
 口よりも先によく出る空涙 つき子  
 泣いた後舌を出して空涙 誓二  
 空涙つか本当に泣けてくる 柳宏子  
 空涙ながら無心を聞いてやる 緑之助  
 空涙心で赤い舌を出し 好一郎  
 無心いよときの男の空涙 素酒  
 銭にする野心が流す空涙 百酒

しなやかな指からませた空涙 小松園  
 心底を見せぬ女の空涙 雀踊子  
 真実を裏切っている空涙 維久子  
 政界の政治の中の空涙 祥月

兼題「神酒」 中島生々庵選

ありがたく勿体なくも神酒をなめ 亜純  
 頂上で神酒を祝う山開き 季賛  
 積み上げた缶詰は神酒にて候 静観堂  
 笑顔なく巫女は神酒を酌ぐさため 芳子  
 土器けにお神酒目立たいしみをつけ 没食子  
 法善寺おみきの味をことうも変え 野迷路  
 水くさいお神酒も飲んだ生き残り 日満  
 さそい水のように棟上げお神酒飲み 日満  
 香が抜けた神酒有難く頂戴し 静香  
 お神酒いただき古い日本の義理守る 俊夫  
 珍客へお神酒も水を足して出し 滋雀  
 二級酒で作る母娘の小さい幸 花梢  
 地鎮祭お神酒大地へ奉る 秀信  
 団体の参拜会長だけ御神酒 以兆  
 ボーナスの日です御神酒も特級酒 以兆  
 家族みな下戸でお神酒を忘れられ 葵水  
 恋捨てて契るお神酒のほろ苦く 好郎  
 運転の安全祈願に出たお神酒 葵水  
 神酒の味暖めあつてる共白髪 維久子  
 神酒も巫女を酔わせて粹なこと 幸太郎  
 御預けのかたちに神酒供えられ 小松園  
 かきわけてお神酒呑むのも皆氏子 一舟  
 お下りのお神酒は下戸も断われず 多久志  
 一級で二本にしときまひよと御神酒 素郎  
 神酒にしては和解のほろ苦い 喜風

銘柄は言わない神で酒が好き 草丘  
 神酒一本供え巨木倒される 圭井堂  
 ビヤガーデン神酒を供える社あり 茂男  
 断酒した矢先に神酒をすすめられ 素子  
 先ず御神酒下地に入れて飲み初め 好一  
 今日からはあなたあなたと呼ぶお神酒 摩太郎  
 こもかぶり積んで神社の格を見せ 文秋  
 結ばれるお神酒浮気をしない顔 明朗  
 禁酒する誓いたてるにお神酒要り 弘生  
 お下りの神酒で門出の子を祝い 多久志  
 ふたりだけのドラマお神酒で幕が開く 一二三  
 神酒位で酔う夫が頼りなし 君子

お神酒でも逡巡は容赦してくれず 十郎  
 お神酒呑む順で夫を立てて置き 一舟  
 この味は軍歌うたった日のお神酒 雀踊子  
 禁酒して神にもお神酒まいらせず 静馬  
 載けばおみき二級酒らしい味 生々庵

▼(三才と軸吟だけ発表・以下次号)

兼題「天才」

若本多久志選

スリの天才己れの業が悲しゆうて 生々庵  
 天才が鳴らないラッパ抱いている 悦郎  
 天才の静脈の透く細い指 薫風  
 スリにさえ天才があり道けわし 多久志

兼題「路傍」

菊沢小松園選

さりげなく路傍の石が聞くうわさ 岳人  
 炎え尽きた恋が路傍に落ちている 大輪  
 鍵っ子に部屋も路傍とおなじ時 好啓  
 思い出が路傍の人にしておかず 小松園

兼題「タイトル」

西尾

葵選

タイトル奪って野獣の眼に変わる 葉子  
 タイトルをお国訛りのままで取り 小松園  
 タイトルに生きる体臭もつ男 雀踊子  
 これでもかこれでもかこの赤い帯 栄  
 昇中お見舞い申しあげます (句会部)

尼	野	久	堀	藤	勝	板	山	藤	原	原	い ず も 川 柳 会
	村	家	江	田	部	垣	本	原			
緑 之 助	岬 月	代 仕 男	正 朗	軒 太 楼	湖 楽	草 丘	朱 紅	河 南	章 峰	独 仙	

暑 中 お 見 舞

# 川 柳 東 大 阪

会 長 竹中 肖二 副会長 桑原 喜風  
副会長 落合 思月 外 役 員 一 同

## た け は ら 川 柳 会 一 同

〒 725 竹 原 市 竹 原 町 田 中 山 内 静 水

小	脇	三	楠	〃	岩	た け は ら 川 柳 会
島	本	宅		〃	本	
蘭	政	不	貞	笑	文	
幸	己	朽	子	子	晴	

山	楨	高	森	時	た け は ら 川 柳 会
内	田	橋	井	広	
静	英	鬼	菁	一	
水	詩	焼	居	路	



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳大版 児島与呂志報

偶然をよそう女におごられ 胡蝶  
二次会へ肩を組んだは覚えとり 三十四  
みの虫がそつと桜に顔を出し 敏  
取りたくはないが桜のいきさよく 重人  
年輪の額に負けず土に生き 笑風  
額ほどの土地も税務署見逃さず 徳松  
無住寺に名も無き草が春を告げ 六龍子  
社長とも菩提寺一緒であった縁 微水  
本来の姿は何処へ布施集め 菱舟  
観光のお寺世相に遅れまい 秀峰  
さんざんに女泣かせた洗い声 本蔭樺  
末席の声が大きい行動派 一乃字  
買占めへ声なき声の庶民勝つ 漁人  
折詰の商魂底へ秘めておき 喜醉  
折詰に昨夜の腹痛忘れとり 壽子  
ミニも乗せ貸し切りバスで寺巡り 道  
景に来て 折詰門出祝う 春 楽々  
母作る 景詰門出祝う 春 楽々  
紅白を余分に買うて荷をよめる 与呂志

とんぐり川柳会 谷垣史好報

人形から見れば人間淋しそう  
見上げればビルの高さがのしかかり  
目立つから先に行つてと追い出され  
マゴトの人形へおしやまな口を  
働き蜂まだ動いてるビルの窓  
人形の名付けの親は娘らの知恵  
人形の瞳で確かな愛を受け止める  
目立ってはならぬ見合いのお供なり  
ビルの間一坪の地で商売し  
人形の心は買った人が知り  
人形は十二単衣の儘ねむる  
ビル建つて大文字の火小さく見る  
人形になつて女の影がない  
人形を彫る一徹の刃研ぐ  
愚痴りたい時人形に話しかけ  
豪雨氾濫牛も人形も流れてき  
目立たない男の妻が美しい  
ビルの気まま日照権にたしなまれ  
さびしさに抱く人形が笑つてる  
オースケー川柳会 大坂形水報  
通り雨の残して行つた砂手紙  
砂文字に誓つた恋も波に消え  
虚無の掌に砂はこぼれ落ちるだけ  
砂浜に残した泪波が消し  
青春を引きつけた母の白い砂  
いかもちをこなして母のたくましさ  
いかげです相合傘の廻り道  
かけもちのきかねあの世へ友いそぎ  
掛持ちでかかないまへんと得意顔  
砂浜が無くなり故郷が栄えてる  
小企業一人何役やつて喚え

横綱の尻に無念の砂がつき  
バスの客拾いに來てる宿の傘  
さしかけて裾が気になる絹蛇の目  
パート終えこれから母にもどる服  
高知川柳社(高知市) 川竹松風報  
骨壺の軽さよ寒い雨が降る 泰章  
早産の孫の軽さが物足らず 裕  
男ふと四十五キロ意識する 勘平  
一升が軽い課長のお供する 乱歩  
余りにも軽いお骨にまた涙  
眼帯を外した肩が軽くなる 梨生  
式間近娘気軽に立つ返事 柳水  
OKと軽く返して下校の子 窓花  
鉄骨の上の職場の身が軽い 松風  
買物の一万円の荷が軽い 芽十  
ステツプも軽くすてきな人の胸 風舟  
満員車都合の悪い人がいる 桂緑  
満員へ割り込む顔の雨に濡れ 破竹  
パチンコも満員春の雨恨む 一巻  
満員の吊り手に生活を励まされ 寛  
持ち物が女に多い満員車 狂声  
満員車ゆがんだ貌でカーブする 恭一  
お隣の息が気になる満員車 伸  
満員へ歩こうという乗るという 白影  
城北朗句会 川口弘生報  
青二才めがと老人思うだけ 春菓  
寄りかかる壁に二月の冷えを知る 占魚  
二次会へ互いの財布あてにする 三十四  
無二の友花のうてなで待たしとき 好古  
角隠し二度目と見えぬ清純さ 鉄児  
押売りへ二階の子供留守を告げ 濁水

空耳で二浪の決意聞いておき 十郎  
門限が有って二人清い仲 大輪  
同行二人諸行無常の旅つづき 弘生  
はやいもの孫の成人式もつづき 賛平  
二次会に心にもなくついて行き 繁子  
お水取りくれば春くる二月堂 秀村  
一タス一は二だが腹の虫おさまらず つね  
夕立ちの前兆やろか種びかり ますえ  
見合いたした女は鼻の穴が見え 生仏  
長男は弟の無理聞いてやり 隼人  
歩くだけ固くつないだ手の温み 志津  
長男の誕生名前が待って居り 満津子  
まるべに川柳会(大阪市)村田瓢太報

茶摘みする手も馴れた頃たそがれる 一世  
人垣の中は何かと伸び上り 貞  
時刻表早くも心旅にあり 幸子  
冷めるまで待てぬ子供をもてあまし 茂児  
冷めて見れば唯平凡な男なり 寿子  
カッコいいビルに勤めて羨まれ 星斗  
午後十時までもうけてはるビルの窓 立児  
五月雨の竹のリズムも嵯峨のもの 好郎  
やがて散るりのズムも善根残さばや 瓢太

京都の塔の会 松川杜的報

マイカーをまとめてフェリー春消え 水客  
小じんまりまとめて増水の位置が 杜的  
任かせてくれるかと下手からまとめ 蘇堂  
裏切の肚でまとめる 語気軽く 求芽  
手際よく記事をまとめる地方記者 誠史  
帰省して昔をたどる道がなし 飛鳥  
川柳ささやま 河原みのる報  
売店はしいて売る気のないところ をさむ

売店の一輪孤独をいやされる らしい子  
一坪の売店ひとりよく稼ぎ 近江  
美人でもないのに売店よくはやり 掬水  
販売機売店の娘は読み耽り 宗珠  
今日あたり医師待って。ハルガスト みのる  
やせ我慢ひとり爪弾く三の糸 無聖  
やせ我慢あとでばつぽつこたえて来 素水  
やせ我慢母の顔見るまでこらえ 英断  
手加減の筈に保津川肝冷し 枝葉  
税務署に舌打ちさせた涙声 可住  
スूप 飽き茶漬ほしいと羽田着 百合子  
赤ちゃんにも一寸飲まして。スूप 無鬼  
制服でみそめ和服で惚れなおし 越山  
中学生ズボンの線を気にしだし 蜻蛉  
四面楚歌でもいい制服に恥じず 雅佐女

和歌山七面句会

三幸報

道一つ隔てて哀れ学区制 富子  
蟻の道かがんで蟻に無視される 葵水  
退屈の相手妻では気にいらす 福代  
廻り道してまでピクを見せにくる 太茂津  
道を説く人とパチンコ屋で出合い 芳童  
たんぼ道へヒが逃げたら蛙が居 しづえ  
この道を執念と行く芸の人 栄

十円の子供相手で世を忍び 清和  
意気盛ん草餅食べてからの道 光治  
人を招くただそれだけでほのぼのと 陽一  
一台になってハイウエー恐くなり 和代  
影二ついつもの緑散歩道 勇次  
銭湯へ母と歩いて心足る 芳子  
つけ湯も相手と歩合せてる 政夫  
出席を拒み小さな意見とす 三幸

川柳たけはら 森井菁居報

歓迎会早くもスター誕生す 静水  
三者として立入りすぎたかなと思ひ 房子  
手持無沙汰は朝刊がまだ来ない 蘭幸  
子に苦勞して生甲斐かも直れず 文明  
これからの余生へプランつく花恋 凡文  
散る花の挽歌を語りつく花恋 不朽  
信じても女の私にある不安 笑子  
ある時まだ十六の妻である 文晴  
出ししふる妻へ財布がまかされん 雅鳳  
アメリカと日本でゆらぐ黒い霧のぼら 一路  
旅に出す嬉しさと寂しさと 貞子  
花といふ今日は総てを忘れ去り 一と  
ばんだちゃんママに。ばんだちゃん 英詩  
新免許夫と子だけは乗ってくれ 菁居  
充ち足りた日を爽やかに夕陽落つ 鬼焼  
失敗が許せぬ妻の裁ち鉢 英詩  
発車ベル母の顔しか見ていない

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL 06 3345114  
夜間 06 44008

10月7日(日)

同人総会は午後二時から  
二賞発表会は午後五時から

(地方のご出席者案内書呈)

会場は 大阪府中小企業文化会館  
(五階五一号室)

(天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町  
九丁目下車南三百米・電771・4096)

面会時間カチカチ残業なのかしら  
呑みこんだことばこんな疲れさせ  
冷静を保つ立派な敗者なり  
本当を話せば妻は笑うだけ 季 贊

川柳ウイロー社(ハワイ) 林蒼蛇樓報

詳細は次便と云うてそれっきり  
梅の香を添えて郷土の花便り  
国訛り見えてなつかし母の文  
意見した手紙に紙幣入れであり  
妻の文待ちこがれてた抑留所  
親展とあって好奇の目がひかり  
旅便り母へは文字を太く書き  
手紙より申身の写真奪い合い  
在りし日の夫の手紙は色褪せて  
拝啓と書いて敬具はもう古い  
面と面言いくいので手紙にし  
初便り孫の写真も入れて出し  
手紙書くことが苦になる筆不精  
末の娘も手紙をくれぬ輪となり  
印象が手紙紙の届かぬ国へ行き  
我が夫は手紙の届かぬ国へ行き  
呼び寄せの夫の文に胸がこし  
懐旧にしばしひたつた古手紙  
母の訃に涙でつづる重い筆  
文盲の悲しさ書けずただ涙

浄美 西合 扇水 紅溪 峯円 河舟 美和 蒼蛇樓 雪女 山香 美千香 暁舟 十吉 万里歩 エス子 公女 北海 多磨 千枝 美沙 稠雄 椰子郎

礼状も出さず多忙で三月過ぎ  
手紙ではまともりつかずまた出かけ  
老いた母うれし涙で読む手紙  
エヤメール太平洋流を一またき 朝 雲  
菜の花・和歌山・新宮合同会 悦郎報  
みかん畑元をとらずに曲り角としよ  
急行通過みかん列車一番線 柳 志  
酔醒めるときだけみかんに馴染む舌 百 酒  
暮れて行く淋しさ獅子岩も岩亀も 薰 風  
海峽の神秘が客をだまらせる 儀 一  
弁当がうまい海峽の水の青 操 子  
深呼吸してひとり男船に乗る 天 笑  
よく喋る波へ無口な船走る 岳 人  
船だけは一等という旅をする 庄 治  
出帆が急にきまって逢わずゆく 暢 栄  
滴の音きこえてからの怪けわし 肖 二  
滴の音聞えて脚が速くなり 大 輪  
カメラからはみ出る高さに那智の滝 為 男  
瓶に詰め仰山そうなる滴の水 智 子  
真直に滴は心へ落ちてくる 不二也  
流れ星別かれし人の噂聞く 静 香  
明日は嫁ぐ娘と背中を流し合い 幸 代  
一日の無事は背中を流し合い 柳 宏 子  
黒潮の流れ春の陽はね返す 綾 女  
風潮に流れされ母もパンタロン 綾 女

言い負けて空を仰げば星流る  
名にかけてみかんに残す文左衛門 義太郎  
堺・若芽合同会(堺市) 吉岡青香報

続いてるらしい二人の話振り 茂 美  
クジ売場市民の列に夢続く 藤 持  
要領を得ない祝辞がまだ続き 育 園  
倅が続いて神様そっちのけ 柳 影  
地の果てに続く童話を聞く枕 岳 人  
この親につづげと云える力なし 憲 祐  
恋捨ててるつもり芝生青すぎる 千 万 子  
芝生(ねころ)ば苦のない人にみえ 宏 子  
アベックを二匹の猫にした芝生 天 笑  
煙に巻く嘘に自分が酔うて居る 凡 九 郎  
柿赤く煙も立てぬ過疎の村 遊 仙  
さりげなく煙見ている負けている 夢 成  
地図にない路に迷っているデート 儀 一  
遭難の現場涙をそそる地図 雄 次 郎

佳句地10選(前月号から)

河原みのる選

建国の日に反対したけど有難い  
握手など知らない母の低い腰 鶴 丸  
見送り三振そんな人生くりかえし 十 郎  
玄関の水仙お越しやすという姿勢 凡 九 郎  
それぞれ葉にそれぞれ虫が住み 一 栄  
人生に我流の通性道もあり 綾 女  
光るものおそれる野性の血が流れ 藤 持  
古い子の手が人形に話しかけ 雀 踊 子  
ギブエンドイクの賽銭はずみまず 楽 水  
亨年二才生きてれば生きてれば 静 水

地図を手に東京タワー見て通り  
 地図にない町まで分譲住宅地  
 雨宿り走れる若さ見直され  
 走り寄り胸の鼓動を波に告げ  
 ほどほどに出来ぬ一本気な男  
 文化財にされてしまった一本気  
 一本気のとこが惚れたと云う芸者  
 一本気対手のことなど気にせず  
 電柱の上で旗振る一本気  
 川柳東大阪 竹中肖二報

客筋に歌まで変えるバスタード 文 秋  
 客筋も見分けてとんだことを云い 儀 一  
 山の 駅客筋変える雪が降り 悦 郎  
 客筋は馴染メニューのいらぬ店 喜 風  
 上客へ女将お世辞の度が違い 好 一  
 外商で儲けて店はすましてる ひろお  
 ママゴトの君と僕とが持つ世帯 誓 二

### 一分間の柳論

数年前——小生の懇意なある川柳非詩論者  
 から書翰が来た。それによると、「市民的な談  
 林俳諧から出た芭蕉が詩精神の復興をとねえ  
 て正風を立てたのが現在の俳句につながって  
 おり、一方談林俳諧の市民的コケイ句もす  
 たらず、これを学ぶための雑俳（前句附）か  
 ら川柳が生れたので、俳句と川柳は元々一つ  
 の根から生えた二つの枝である。したがって  
 川柳を芸術化、詩化しようとするれば俳句に  
 なってしまい、俳句と川柳の区別がつかなく

師弟今日君と僕との仲になり  
 屋上の灯何はなくとも君と僕  
 ひよっとことおかめが似合う君と僕  
 ちやちな鍵かて安心したつもり  
 ペテン師の小道具金ピカ揃ってる  
 金暴騰我が家に金歯だけが  
 金色のラベルを貼って嘘飾る  
 金屏風母の願いは無限なり  
 渦潮をくぐり美事な鯛となり  
 裏木戸をくぐる姿が猫に似る  
 山門をくぐれば匂う梅の花  
 里の門くぐると夫かしこまり  
 くぐり戸を開けて人柄みて通し  
 トンネルをくぐれば春の海うらら  
 体臭をうつすベッドにある若さ  
 嫁の荷のベッドにひとま奪われる  
 附添婦ベッドの下で小さく寝る

君 子  
 葵 水  
 酔 々  
 古 方  
 柳 宏 子  
 百 合  
 牧 人  
 静 香  
 肖 二  
 智 子  
 一 栄  
 あ い き  
 鶴 声  
 三 十 四  
 雀 踊 子  
 綾 女  
 思 月

### 福浦勝晴

なる——だそうである。極めて初歩的な論だ  
 が、川柳の生い立ちを單的に説明しているの  
 で、これに対して異論をさしはさむ余地はな  
 い。それにしても、近年あちこちの柳誌を拝  
 見していると、すこし難解の句が多すぎる。  
 前衛川柳だとか革新川柳などとカッコいい事  
 をいって、いくら考えても第三者に判断でき  
 ないような難解句が随所に散見される。一考  
 を要するものである。最近の私の句——  
 長髪をするしか能のない男

南大阪川柳会 金井文秋報

演技派の妻に集金丸められ  
 華やいだムードにお祝い言い忘れ  
 迷者かね無口な父の電話口  
 ポーナスに響くグラフへ湧くフェイス  
 健康の外に資本のない男  
 健康な姑に嫁の息が切れ  
 血の滲む演技の奥にある重み  
 健康はいいなりズムのある生活  
 司会者の演技に客も踊らされ  
 グラフの線の落ちてるとこ、恋した  
 雑巾のぼろへ真実こぼれそう  
 健康になればボチボチ欲を出し  
 ひな祭母も華やぐわらべ歌  
 堕ちて尚華やいだ過去にしがみつく  
 平凡な平凡の平凡雑巾の唯汚れ  
 硬骨の健康すぎて邪魔がられ  
 親ゆずりの格式保ち火の車  
 親ゆずり他人のお世辞聞き流し  
 僕もまたグラフの中にお小きい  
 雑巾と云えどくらしにかかされず  
 演技力無い子に托す子ほんのう  
 グラフにもはつきりと出き社。ホープ  
 ありありとチャンス逃がれグラフを見  
 さびきびきと演技を見せる馬の脚  
 下りて来た街に華やぐものが無い  
 健康のやいだ過去を命として燃やす  
 健康のためとゴルフへ理屈つけ  
 傷ついた心に演技術もなく

儀 一  
 滋 雀  
 柳 志  
 静 香  
 凡 九 郎  
 肖 二  
 花 梢  
 喜 風  
 柳 宏 子  
 一 栄  
 俊 夫  
 静 少  
 好 一郎  
 好 一郎  
 好 一郎  
 悦 郎  
 古 方  
 君 子  
 好 一郎  
 好 一郎  
 悦 郎  
 鶴 声  
 綾 女  
 金 三  
 醉 々  
 智 子  
 西 合  
 文 秋  
 形 水  
 警 馬  
 葵 水  
 章 雅  
 一 郎  
 八 郎

# 八月冷線句会

日時 八月七日(火) 午後六時  
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話 622・1275番

柳 話 川 村 好 郎  
(今月の出題・有信新之助)

兼題 「渋滞」 「泳ぐ」 「子約」 「コイン」

金井文秋選  
本多柳志選  
八木摩天選  
正本水客選

席題 三題 当日発表  
会費 二百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

9月の兼題 「ひとり」 「マ」 「柱」 「実」 「力」

## ・ 募 集 ・

### 十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多久志選  
水煙抄(10句) 北川春巢選  
課題吟(各題5句以内)

「スポーツ」 草深酔升選  
「へそくり」 森田布堂選  
「社会面」 岡村久志良選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

### 十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多久志選  
水煙抄(10句) 北川春巢選  
課題吟(各題5句以内)

「七五三詣り」 小野克枝選  
「使いすて」 高木桃里選  
「劇画」 阿万万的選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

前月号は29日に発送しました

定価 二百円(送料十六円)

半年分 千二百九十円(送料共)

一年分 二千四百円(送料共)

昭和四十八年 七月二十五日印刷  
昭和四十八年 八月一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

編集兼 中島蓬太郎

印刷所 太陽印刷株式会社

郵便番号 542

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番  
電報口座 大阪・三三三六八番



## たのしさひろがる お買物



# 阪急

大阪梅田本店  
十国阪急  
神戸三宮支店  
東京大井町  
数寄屋橋阪急  
京都宇治支所  
ロスアンゼルス阪急

## ・ペンペン草・

★暑中お見舞い申しあげます。

★輪島が横綱になったり、金田ロッチが大暴れするものだから、ペンを片手にテレビがたのしい。

★テレビといえは六月二十七日午前11時から11時30分までの朝日テレビの「えふろん」に漫才作家として出演したが、内容は標語のよまじやまばなしだった。ゲストとして一緒したのは、大阪大学名誉教授・関西学院大学教授という肩書の宮本又次先生だ。秋田實先生の七光りのおかげで筆名を

## 葉子コーナー

▼今年体が不調のため旅行をみなおことわりしてあります。そのかわりに公害の少ない近くの川や山へハイキングに出、行きます。川原に四、五人のヤングがギターを弾いて歌っていますと、みるみるうちに二、三十人にふくれ上がりスクエアダンスなどをして楽しいハイキングにしてくれませう。

ご存じだったからカタクならずには仕事のできたこととありがたかった。

★元不朽洞会々員の杉本辰一、安部兼両氏と、川柳塔の広告を無料で出してくれている標語愛好会主幹南沢常吉氏にも出てもらった。この四名で六千句以上の入選標語があるというたら、司会者の落語家小柴さんがびっくりしていた。いずれも四十年からのキャリアがある年だから、四人で百六十年に六千句なら、そうタマげることもあるまい。

★司会の小柴さんの師匠である故林家染丸さんとは、かつて「小ばなしの会」のメンバーだった。★水府先生が亡くなられたのは、40年8月6日だが、ぼくはその日、出先から四天王寺の告別式へ駆けつけたが、その時の服装が赤茶色の半袖と

いう、どう見ても下っ端の芸人ようだった。みなさんは暑いのに黒一色でキチンとしていた。そんななかで多くの服装があんまり派手なので焼香をせずに帰ろうとしていたら、モーニング姿の染丸さんとバツタリ出あつ

た。肩をならべて長蛇の列にはいつたまでとはよかつたが、どこからとなく「染丸師匠がお弟子さんを連れて来てはる」

★染丸さんは落語家の野球チームの監督だったが、凡フライでもみな落とすあたり、やっぱり、落語家「チームらしかった。」★水府先生は宣伝文の天才で、ギリコの一粒三百メートル、などは教科書にも出ているし、先生は共選で二回ご指導ねがったことがあった。

★近く染丸を襲名するといふ小柴さんの司会や、水府先生のお作がその日に話題になったり、川柳とは無縁でなかったことは意義あるテレビ出演だったとおもう。

★終戦の日の特集をしたが、あのころ、物資不足で「足りぬ足りぬは工夫が足りぬ」という標語があった。戦後、この標語が足りぬ足りぬは夫が足りぬ」と書きかえられたものだ。戦争処女の悲痛な叫びがそこにある。★暑中広告ご協力感謝。(不二田一三夫)

暑中お見舞い申しあげます

季節料理・折詰

# 大 萬

大阪市阿倍野区松崎町

TEL (623) 5031・5032

南区豊屋町三ツ寺センター

TEL (211) 9184

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた  
魚又楼

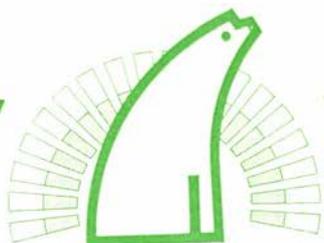
TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)  
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る  
海岸美を  
風光明媚な

昭和四十一年一月二十五日  
創刊四十六年八月二十五日  
大正十三年八月二十五日  
通巻五五五号  
第三種郵便物認可  
印刷日発行

川柳塔

八月号



HORAI



蓬萊商品の目印

アイスクャンデー

あずき・メロン・パイナップル・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



大阪・なんば

〈出張販売〉高島屋 そごう・阪神  
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店



定価二百円 (送料十六円)